NMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNM

会　報

2016年12月1日　No. 21

ニチメン東京社友会

〒100-8691 千代田区内幸町2-1-1 飯野ビルディング 17F
URL http://www.menkwa.com
E-mail menkwa@sojitz.com

NMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNM

【目　　次】

【ページ】

2017年度、新年賀詞交歓会　ご案内 …… 3

1．2016年度　総会・懇親会（7月15日　於　双日㈱会議室）
　① 挨　　拶……会　長　石原　啓資…… 4
　② 来賓ご挨拶……双日㈱代表取締役社長　佐藤　洋二…… 5
　③ 総会・懇親会報告……編　集　部…… 8
　　――付録：総会出席者名簿
　④ 2015年度事業報告および収支報告、ならびに2016年度事業計画および収支予算
　　……世話人　桝山　俊次 …… 12

2．会員動向およびその他報告事項
　① 新規加入者 …… 14
　② 2016年度　年会費入金状況とお願い …… 14

3．慶弔関係
　① 2017（平成29）年度　長寿者表彰者 …… 16
　② 2016年度後期　訃報 …… 16

4．会員寄稿文
　① 日本語……三分一克美 …… 17
　② 『ミステリ小説断想』（5） ……福富　直明 …… 19
　③ 「AIIB」の世銀、アジア開発銀行、欧州開発銀行などとの協調融資、
　　並びに「一帯一路」戦略の現状とその歴史的な背景……中川　十郎 …… 22
　④ 米大統領選に異文化Showを見る ……浜地　道雄 …… 25
　⑤ 南緬紀行記……高尾　　勝 …… 26
　⑥ 今「平和」とは何か……竹内　可能 …… 30
　⑦ 大連今昔物語……安武　国章 …… 35
　⑧ 「ミヤンマー再訪記（続）」……丸野　　純 …… 39
　⑨ もっとも安上がりな自費出版……芳賀　信明 …… 42

5．同好会、部門別OB会
　① ニチメン機友会……星加　　恭 …… 44
　② 俳句の会「いろは句会」……塚本　幸雄 …… 47
　③ 第29回ニチメン如月会（経理部懇親会）開催報告 ……浅利　眞司 …… 48

6．追　悼　文
　① 丸山修作さんへの弔辞……辻井　準一 …… 49
　②-1 前会長島崎さんを偲んで ……石原　啓資 …… 50
　②-2 ｛追憶｝端倪すべからざる人文主義者、島崎さんのこと……竹内　可能 …… 50
　②-3 わが師島崎さんのこと ……吉海　秀造 …… 54

7．社友会役員・世話人一覧表ならびに連絡先 …… 55

8．編集後記 …… 56

飯野ビル全景

ビル正面入口から受付フロアまでの
直通エスカレーター

双日㈱　オフィス　周辺の案内図

〒100-8691　千代田区内幸町２－１－１　飯野ビルディング

地下鉄アクセス　メトロ千代田線・丸の内線・日比谷線「霞ヶ関」下車、出口C4
メトロ銀座線「虎ノ門」下車、出口9

＊＊＊　2017年度新年賀詞交換会のご案内　＊＊＊

恒例の新年賀詞交歓会を下記要領にて開催いたします。皆様、奮ってご参加下さい。

開 催 日　：　2017年 1 月19日(木)　開会11：30 am

御注意！　例年より30分早めました。開場も30分早く11：00amからとします。

会　　場　：　双日株式会社本社・21階大会議室

東京都千代田区内幸町２－１－１（飯野ビル内）

アクセス（メトロ）　：

＊千代田線・丸ノ内線・日比谷線「霞ヶ関」出口Ｃ４方面へ。

案内板に従い、館内エスカレーターを利用して 3階オフィスロビー 迄。

＊銀座線、「虎ノ門」下車、出口９。飯野ビルまで徒歩５分程度。

会　　費　：　無　料（軽食、飲物を用意致します。）

特記事項

AAA　同封のハガキで **出欠** をご返事下さい。**締切12月15日（木）必着**。

序でに　**HPのこと、アンケートにお答え下さい。**

……HPのドメインは、 http://www.menkwa.com/ です。一方、Yahoo 、Google等で「ニチメン東京社友会」を検索すれば簡単に閲覧出来ます。

BBB　このビルはセキュリティ確保のため、**入館カード** が必要です。

３階ロビーの双日受付付近で待機している担当世話人に氏名を告げて、このカードを受取った上、ゲートを入って下さい。又、退館の時も必要です。

それまでは必ず手許に保管下さい。

ゲート出入りの要領は、SUICA や PASMO の 使い方と全く同じです。

＊　その他お問い合わせは、会報末尾の「世話人一欄表」記載の世話人にお寄せ下さい。

なお､社友会事務所のFAXは　03-6858-7216 Eメールは　menkwa@sojitz.com です。

（以上）

会　長　挨　拶

会　長　石　原　啓　資

只今ご紹介戴きました、会長の石原でございます。

皆さん方とは本年の新年会以来６ヶ月ぶり、皆さんのお元気なお姿に接しまして、大変喜んでおります。

また本日は、ご多忙の中、双日株式会社から佐藤社長さま初め、20名の役職員の皆さま方に御出席賜わりまして、有難うございます。また、本年度より双日株式会社様から更なるご高配を賜り、感謝申し上げます。

扨て、先月23日、イギリスがEUから離脱するという国民投票の結果が出まして、株、為替が大変荒れております。株については23日以前の状況に戻ってはおりますが、為替については100円台の前半ということで、厳しい状況が来るのじゃないかな、というふうに思っております。

一般の会社のほうでも、この為替によって、業績がキビシクなるのじゃないのかな、という心配をしております。

一方、先般の参議院選挙によりまして、与党が過半数以上の大勝をした、ということで、国民の大多数の方々が政治の安定性を求め、経済の更なる加速を望んでいるのではないか、ということで、安倍総理も10兆円近くの補正予算を組んで、デフレ脱却を一気に進めよう、ということのようです。

ところで、前年度2015年度は商社を取り巻く環境は非常に厳しく、大手２社が赤字決算ということですが、このような環境の中で双日株式会社さんは前年比増収増益という立派な成績を収められた、という報告を受けております。

これはほかでもなく、経営陣の皆さん方の御尽力の賜物だと思っておりまして、敬意を表します。

扨て、わがニチメン東京社友会も、先程の総会が11回目ということで、新たな10年に突入致しました。我々としても、この社友会の皆さんの社交の場、親交の場として、より活用して戴けるような形で、改革をして行かなければいけない、と思っております。

先程、皆さん方からご承認をいただきました新しい役員・世話人の皆さんを加えて、新旧交代を徐々にながら進めている、というのが現状でございます。

まだまだ加速しなければいけないかな、というふうには思っております。

ところで、今年の新年会で、皆さん方に我々の課題を三つ、お話した中で、二つについては残念ながら殆どが前に進んでおりません。

私の努力の到らんところかな、ということで、申し訳けなく思っております。引き続き、会員の数を増やす、また、女性の会員を増やしてゆく、ということは我々社友会の幹部といたしまして、全力で進めて行きたい、と思っております。

本日ご出席の会員の皆さん方にも、後輩諸氏を社友会のメンバーに勧誘して戴きたい、と密かに思っておるところです。何分ヨロシクお願い出来れば、と思っております。

我が社友会も、お正月の新年会、７月の総会の後の懇親会、ということで、年２回の親睦会、および、年２回の会報発行、というような形で活動を進めております。皆さん方と少しでも多く接触出来る機会、また、会話が出来る機会を増やしてゆきたいと思っておりまして、先ずホームページを刷新して行きたいと思っております。

先般、外部の業者とも相談して、ホームページの改定を早急に行なってゆきたいと思っております。ホームページが逐次ホットな情報を皆さん方に提供し、出来れば意見箱のような形で、皆さん方のご意見を戴いて、社友会の運営に反映してゆきたいと思っておりますので、引き続き御支援、御鞭撻の程ヨロシクお願い致します。

最後になりましたが、そろそろ本格的な夏が訪れます。お身体に充分気を付けて、来年の新年会には又、お元気な皆さん方とお会い出来ることを楽しみにしております。

それと、双日株式会社さんが、益々ご繁栄をされることを、祈念して、私のご挨拶とさせていただきます。

どうも有難うございました。

Nmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnm

来 賓 ご 挨 拶

双日株式会社　代表取締役社長　**佐　藤　洋　二**

皆様方とは、今年１月の賀詞交歓会以来の再会ということになります。本日は天候不順でゲリラ豪雨的なものも各地で見られ、皆様方のご参集を一寸懸念しておりましたが、かくも多数の方々がご参加され、皆様方の元気なお顔を拝見でき、大変喜ばしいことと思っております。

また、石原会長のご尽力の結果でありますが、このOB会が、皆様方にとっても大変有意義な会として今後とも運営されてゆくことを切に望みたいと思います。

さて、双日株式会社の社長として近況をお話し致します。最初に６月16日の株主総会ですが、皆様方にも多数ご参加頂き、議決権を行使頂き無事乗り切ることが出来ました。この場をお借りし、改めて御礼を申し上げたいと思います。どうも有難うございました。

株主総会は、年々参加される人が増えており、個人株主様が色々な形で参加される機会を望んでおられるようなので、今年は初めて集中日を外しました。従来は他社と同じような集中日

に日程を組んでいましたが、今年は6月16日と集中日でない日を選び開催しました。多数の株主様のご参加を予定し、当初は3,000名を超えるのではと思っておりましたが、結果として2,700名強となりました。昨年は2,592名でしたので、若干の増加となりました。ここ数年を見ますと、最初の頃は1,200名、1,500名あたりで、第一会場・本会場で全部済んでいたのですが、この2年あたりは格段の増加を示しています。1,500名から2,000名を超えるのかという昨年は、1,000名以上も急激に増えました。

この中身を少しだけ分析致しますと、来場された個人株主様の半数が従前よりの株主様、残りの半分はここ数年で新規に株主になられた方々で、総会会場でのご質問も従前とは若干違うものであったと思います。参加人数が増えると、当然総会も長引くわけですが、今回はQA（質疑応答）を含め通常より20分程度長い開催時間となりました。頂いた様々なご意見は全て私共に対する応援であり、今後真摯に応えて参りたいと思っております。

石原会長からも業績について御紹介がありましたが、一番お尻の当期利益では、結果として対前期比増益ですが、内容的には市況の影響を大きく受けております。

金属・エネルギー関係の価格の下落があり、このセグメントに於ける売上、収益、売上総利益が大きく減りました。その減った分は、ほかでカバーするということで、今年から始めた九本部のうち、残りの七本部で何とか頑張って増益に持ってゆく、という努力をしてきました。

お尻のところまで来ると、従前は繰延資産の取り崩しがあり、対前期比で言えば、先期までは50億円位の繰延資産の取り崩しを行なっていましたが、この3月にはこれがなくなり、ネット利益では大きく増益という結果を見たということです。言い換えれば、普通の会社の状況にこれで完璧になったということで、これからは上から下まで全て通常の税率がそのまま適用される、ということでございます。

このような状況ですが、グローバルな経済環境は決して楽観出来るものではございません。

英国のEU離脱は、一時的であったとしても市況の大きな混乱を招きます。グローバル化といっても、果して一定のグローバル化という形で今後も進んで行くのか、一寸違うのではないか、という危惧も世界情勢の中で出て来ているのではと思います。

これに追い打ちをかけるように、アメリカの大統領選挙があります。クリントン氏とトランプ氏は、中々良い競争をしているようですが、その中味たるや厳しいもので、私から見て世の中の夢を語れるような大統領選挙にはなってないと危惧しています。

選挙結果による大きな変化は、私どもは望んでいませんが、場合によっては、それも覚悟しなければいけないことを視野に入れ、英国のEU離脱に加え、この問題も考慮しておく必要があると考えています。

この様な状況ですが、弊社の状況を海外からも見て回ろうということで、今年はミャンマー、インドネシア、アメリカを始めとし、最近はベトナム、そして来週からは中国と海外訪問を増やしています。

色々な案件がありますが、現地の駐在員は皆、新しいものに向かって元気に頑張っています。

ミャンマーは、かつてのニチメンも日商岩井も、夫々の思いでビジネスの歴史を積んできた国ですが、ここにも新たな一手を打っております。

ロジスティックス関係で言えば、シティ・マートという現地最大手の物流関連グループとの提携はもとより、三温（冷蔵・冷凍・常温）の物流を始めようということで、新たな会社を立

ち上げ、スタートさせました。このほかにも色々なチャンスをトライしており、ミャンマーでは、かつて両社が築いて来たネットワーク、特に取引先等との関係を最大限活用し、他社に負けない活動に持って行きたいと思っております。

ベトナムでは、この４月から新体制がスタートしました。今年の１月、共産党は新たな体制を発表しましたが、書記長・国家主席以下の人事が刷新されました。この機会を逃さずに私も訪問し、国家主席に面談を申し入れ、会見を実現させました。民間企業としては国家主席との初めての会談であり、現地でも連日放映されるという栄誉を受けております。

このように海外においても、それぞれ過去営々と築いて来たものを充分に活かし、更に将来に向かっての積み上げを行い、新たなビジネスを培って参りたいと考えております。

これらが、いま取組んでいる状況ですが、少し軟らかい「採用」についてお話をします。

今年初めて100名を超える新人が入ってきましたが、来年の内定者は、現在、総合職95名、一般職20名でございます。総合職95名の中の23名が女性で、女性の数はだんだんと増えてきています。また、海外の採用もこの11月に行ないますので、トータルで100名位の総合職採用となります。

この背景には、以前にもお話させて頂きました、NHKのドラマ「あさが来た」がございます。これが私共の知名度を上げるのに非常に役立ち、このドラマが放送されてから、弊社に対するアクセスの回数が格段に増えました。就活の時期は、人事を含め我々は採用に奔走しますが、多くの希望者が我社に応募され、また、トレーニングをして育ててゆけば、私共双日の将来は非常に明るくなると感じさせる良い新人が沢山採用されております。過去の歴史の積み重ねが知名度の向上にも繋がっており、あらためて諸先輩方のこれまでのご努力に感謝を申し上げたいと思います。

冒頭の社友会の会計発表でご報告頂きましたが、OB会の財政状態は赤字のようでございます。私共も儲けないといけませんが、将来的に私共の収益を更に向上させて行く中で、OB会を盛り上げるよう我々も努力して行きます。皆様のお役にも立つよう精一杯頑張り、側面的貢献を続けたいと考えておりますので、どうぞ宜しくお願い致します。

最後となりますが、私共は今年の４月から新体制を取っております。

取締役が１名、段谷・取締役副社長は、水井取締役副社長に交替致しました。

新任の執行役員は３名おりますが、２名は海外、米国と欧州に赴任しており、いま東京に居る新執行役員は一人ですが、双日ロジスティックス社長に就任してもらいました。平川君をご紹介させて頂きます。

長くなりましたが、私からのご挨拶は、これで終了とさせて頂きます。

ご静聴、有難うございました。

第11回　ニチメン東京社友会総会・懇親会開催報告

編　集　部

2016年７月15日（金）、双日本社21階大会議室で開催。
定刻12時、総合司会奥村世話人の宣言で始まった。出席者は来賓含め総数144名であった。

★　第一部　第11回総会：　　議長　倉又副会長兼世話人代表

1．物故者への黙祷　　議長の発声で30秒間

2．総会議事

⑴　承認事項：

①　2015年度　事業報告・会計報告　　世話人　桝山　俊次
（配布資料の通り報告）

②　①に関わる監査報告　　監　事　中原　正紀
（適正に処理されている、と報告）

③　2016年度　事業計画・予算案報告　　世話人　桝山　俊次
（配布資料の通り報告）

以上　①②③、一括承認の議長要請に応じ、満場一致で承認された。

⑵　報告事項：

議長より以下の３点が報告され、異議なく了承された。

①　改選役員：会長・石原啓司、副会長兼世話人代表・倉又則夫、
副会長兼世話人・長谷川洋、監事・大山弘雄、
（以下世話人）栗田久彌、西村照男、倉持次雄、花澤和郎、園山春一、
桝山俊次、北川幸雄

②　新任役員：監事・新藤孝、（以下世話人）奥村睦夫、蛭田恒美、
入江隆史、中田龍彦、木津奈緒子

③　退任役員：監事・中原正紀、世話人・塚本幸雄、世話人・竹内可能

3．会 長 挨 拶：石原　啓資（当会会長）

4．来賓ご挨拶：佐藤　洋二　様（双日㈱代表取締役社長）

★　引き続き、第二部懇親会に移行：小堀裕子さんの司会で進行した。

・まずは「乾杯の儀」：桜井潤一さんの発声で、静かだった場内が一気に賑やかになった。

・人々の輪が広がり終始和やかに進められたが、終了予定時刻がアッと云う間に来て、奥村総合司会の「中締め」でお開きとした。終了時刻、午後２時15分。

2016年総会・懇親会風景

中原監事と倉又代表

乾杯・桜井潤一さん

双日ご来賓

石原会長と北川世話人

大塚さんと東さん

2016年総会・懇親会風景

大工原さん・河西元会長・園山世話人

大山監事・大平さん・長谷川副会長・竹内さん

勝田さん・岩田さん・三枝さん・牧さん

山邑さん・新藤世話人

西村さん・荒木さん・水庫さん

桝山世話人・小堀裕子さん

2016年度　ニチメン東京社友会 総会・懇親会 ご出席者一覧表

2016. 7. 15　開催

（50音順、敬称略）

（一般会員）

ア
相原淳雄
浅井正彦
朝倉重道
甘利　廣
荒木武雄
池永　浩
石黒由紀子
石原靖造
今村隆夫
岩田英昭
上野通明
宇津木長
大北克利
太田弘之
大塚静子
大西　勇
大場禎治
大平栗雄
大森啓作
岡島岩男
小田有久

カ
河西良治
笠原聖子
数森正彦
勝田泰司
鏑木順治郎
蒲澤信男
木寺厚二
金城弘明
五島慎二
近藤厚子

サ
三枝　伸
坂井良司
桜井潤一
佐藤悦三
佐藤三朗
三分一克美
篠塚美郷
柴田　實
白石哲也
杉浦好治
杉本佳久
須藤忠昭
陶山　晃
曽我宏司
大工原正徳

タ
高尾　勝
高木恒久
高瀬允宏
高橋一枝
竹内可能
田尻眞啓
谷　道夫
津田賢一郎
豊木啓喜
中川十郎

ナ
名島憲一郎
南部捷郎
西田武弘
野本定男
橋口喜郎

ハ
橋爪　覚
埴生榮勇
林　博之
林　正弘
平石　豊
平尾龍介
廣田雄太郎
廣本昌也
福富直明
藤井正之助
古家　章
堀　典代
本間登志雄
牧　洋生

マ
松尾憲一
松田邦夫
水庫博夫
水野英幸
溝江博三
宮浦　博
宮本正博
村井靖武
村上泰生
望月昌徳
森江健児

ヤ
安武国章
山岸正雄
山口一光
山邑陽一
山本昌裕
山本幸江
吉海秀造
吉木　健
吉水　稔
吉本邦晴
渡辺重幸

（社友会役員・世話人）

石原啓資
倉又則夫
長谷川　洋
中原正紀
大山弘雄
入江隆史
奥村睦夫
木津奈緒子
北川幸雄
倉持次雄
栗田久彌
新藤　孝
園山春一
中田龍彦
西村照男
花澤和郎
蛭田恒美
桝山俊次

（会員）支援者

赤城枝美
東　信子
滑川和子

（非会員）支援者

小堀裕子
今井恵子
増川恵子

（ご来賓その他）

原　大
佐藤洋二
茂木良夫
水井　聡
松村博史
西原　茂
此田哲也
花井正志
田中　勤
後藤政郎
平井龍太郎
山田　裕
高濱　悟
平川真淳
森田　崇
加藤孝誠
原田信二
小林正幸
松永赳尭
青木聡弥

（非会員）双日支援者

大熊恭子
村松慶子
野村恵子

①一般会員	97名
②世話人等	24名
合計	121名
③双日ご来賓等	23名
総計＝	144名

2015年度事業報告　及び　収支報告

（期間：2015年７月１日～2016年６月30日）

ニチメン東京社友会

Ⅰ．事業報告

	実績	千円 予算
第10回　総会・懇親会開催　（2015年７月14日） 148名　参加	556	700
会報・名簿の発行 会員名簿　2015年11月30日現在 会報19号　2015年12月15日発行　同20号　2016年６月15日発行	1,104	1,500
ホームページの運用	98	350
第９回　新年会開催　（2016年１月20日） 174名参加	653	700
慶弔行事 米寿　10名　の表彰を致しました。	665	500

Ⅱ．収支報告

A）収入の部		
１．会　　費	1,485	1,500
２．双日助成金	2,300	2,300
３．寄　　付	131	0
４．そ　の　他	10	0
合　計	3,926	3,800
B）支出の部		
１．総 会 開 催	556	700
２．新年会開催	653	700
３．会報・会員名簿の作成	1,104	1,500
４．ホームページの運用	98	350
５．会 員 慶 弔	665	500
６．世話人会の運営経費	415	350
７．事務所運営経費	647	850
８．予備費＋雑費	0	100
合　　計	4,138	5,050
C）繰越金及び預り金の部		
当期収支残高	-211	-1,250
前期繰越金	2,603	2,603
当期末繰越金残高	2,391	1,353
（預り金）		
次年度以降年会費等	612	
双日次年度助成金	625	
預り金残高	1,237	
合　　計	3,628	

2016年度事業計画　及び　収支予算

（期間：2016年７月１日～2017年６月30日）

ニチメン東京社友会

Ⅰ．事業計画

千円

	実績	予算
第11回　総会・懇親会開催　（2016年７月15日）	700	556
会報・名簿の発行 （今年度は、年2回の会報のみになります）	800	1,104
ホームページの運用	350	98
第10回　新年会開催	700	653
慶弔行事 （長寿表彰予定者　７名）	500	665

Ⅱ．収支予算

A）収入の部

１．会　　費	1,400	1,485
２．双日助成金	2,500	2,300
３．寄　　付	0	131
４．そ　の　他	0	10
合　計	3,900	3,926

B）支出の部

１．総 会 開 催	700	556
２．新年会開催	700	653
３．会報・会員名簿の作成	800	1,104
４．ホームページの運用	350	98
５．会 員 慶 弔	500	665
６．世話人会の運営経費	500	415
７．事務所運営経費	850	647
８．予備費＋雑費	100	0
合　　計	4,500	4,138

C）繰越金及び預り金の部

当期収支残高	-600	-211
前期繰越金	2,392	2,603
当期末繰越金残高	1,792	2,392
次年度以降年会費等	0	612
双日次年度助成金	0	625
預り金残高	0	1,237
合　　計	1,792	3,629

お願い：

2016年度会費を未納付の方は当年度中の納付に協力下さい。

2015年度分未納者は大至急2016年度分と合わせ納付頂きますようお願いします。

当会会則第11条の規定により2期分の会費未納者は会員資格喪失となります。

振込先は、下記いずれかを利用して下さい。（振込手数料は各自ご負担願います。）

1）郵貯銀行

口座番号：00100－4－318041
口座名義：ニチメン東京社友会

2）三菱東京ＵＦＪ銀行　東京営業部

普通口座
口座番号：8225155
口座名義：ニチメン東京社友会　代表　倉又則夫

振込に際しましては、振込者名欄に　ご自身の名前を最初に　左詰めにて　記載願います。（ネンカイヒ、ニチメン、ＸＸネンドカイヒ等の記載があると振込者名が通帳に記載されず、振込者が特定できません。）

（註1）長寿会員は年会費免除になっておりますが、長寿会員からご送金を頂いた場合は当会へのご寄付とみなし処理させて頂きます。（会運営上大変助かります）
但し、何らかの手違い等であれば事務所までご連絡下さい。

（註2）長寿者氏名：（50音順敬称略）：

石川勝美、伊藤安雄、井本公一、岩居宏一、浦谷弘三、大塚静子、大野久生、大村譲、柿本寅之助、河西郁夫、門松孝、上条達雄、亀田昭、木内純一、北村俊夫、国領和彦、古藤彰三、近藤貞一、斉藤弥、椎木与志也、新野敬一、高間宏治、伊達邦雄、中村昌義、南部晴雄、平岡昭三、廣瀬一彦、福原昭二、藤野泰三、古川熙、堀部義数、松尾憲一、松本忠夫、三嶋敏夫、宮浦博、三宅葉、宮田信雄、望月昌徳、山口富治、山口富美子、吉田孝生　　以上　41名

（註3）2017年度(2017.7～2018.6）年会費納入済会員（50音順敬称略）：

赤間智明、浅井正彦、朝倉重道、伊藤尚志、岩田英昭、宇津木長、海野敏夫、大羽陽一郎、岡田茂、川崎恵美子、川畑正巳、喜多嶋雄徳、京野勉、桜井征夫、新藤孝、高尾勝、高田秀子、土井安之、中村勝、中村静人、南部捷郎、野本定男、羽中田鐵也、平尾龍介、細谷和夫、松坂茂、丸野純、三島光博、宮尾迪子、八津道夫、若月義和
以上31名

（註4）2016年6月以降で　寄付をいただいた方（入金順、敬称略）

国領和彦、門松孝、宮浦博、大塚静子、斉藤弥、宮尾迪子

平成29年長寿者お祝い対象者

白寿　　1919年生まれ　　対象者：なし
米寿　　1930年生まれ　　対象者：以下の７名

＊米寿；石　澤　謙　一　1月　・　松　本　靖　史　1月　・　丸　山　泰　三　1月
松　本　寿　夫　2月　・　矢　口　三　郎　5月　・　三分一　克　美　8月
市　川　元　久　12月

Nmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnm

訃　　報

（平成28日６月１日～28年11月16日）

ニチメン東京社友会

※非会員

	氏　　名	出身部門	ご逝去年月日	享　年
1	新　崎　盛　晨	機　械	２０１６年０５月３１日	７９歳
2	浜　口　信　恭	繊　維	２０１６年０５月３１日	７７歳
3	佐　藤　信　世	食　糧	２０１５年０９月０９日	９５歳
4	祐　定　郁　夫	管　理	２０１６年０６月０８日	８４歳
5	谷　　庸太郎	物　資	２０１６年０６月２５日	７６歳
6	江　渕　正　昭	不　明	２０１５年１０月３０日	８８歳
7	※竹　内　郁　夫	木　材	２０１５年０７月１０日	８３歳
8	丸　山　修　作	副社長	２０１６年０７月１１日	８９歳
9	島　崎　京　一	専　務	２０１６年０９月１７日	８５歳
10	藤　田　一　郎	不　明	２０１６年１０月０７日	９９歳
11	今　田　時　男	機　械	２０１６年１０月１０日	７４歳
12	利根川　慎　治	非　鉄	２０１６年１０月１８日	７８歳
13	※長　　泰　一	繊　維	２０１６年１０月２９日	６５歳
14	※矢　島　真　一	木　材	２０１６年０５月２２日	６５歳
15	国　領　和　彦	専　務	２０１６年１１月１６日	９２歳

ニチメン大阪社友会

	氏　　名	出身部門	ご逝去年月日	享　年
1	下　村　隆　康	機　械	２０１６年０９月１１日	８１歳
2	高　橋　堅太郎	紙　パ	２０１６年０８月０５日	８２歳
3	木　村　恒　子	繊　維	２０１６年０８月０３日	８４歳
4	辻　本　　宏	人　事	２０１６年０７月３１日	８２歳
5	松　本　信　司	広報部	２０１６年０７月２４日	８２歳
6	安　田　京　子	化　工	２０１６年０７月２１日	８５歳
7	杠　　紀　彦	機　械	２０１６年０７月０５日	７７歳
8	上　田　　孝	繊　維	２０１６年０６月０３日	８４歳

ご冥福を、お祈りいたします。合掌

会員寄稿文

日　本　語

三分一　克　美

読書が好きなので、日頃何気なく本を読んでいるが、たまたま“日本語“に関連した本を読みその歴史、現状、問題点等、様々な面から認識をあらたにした。以下の３冊から興味を持った箇所を抜粋した。

1. “日本語を作った男 上田万年とその時代” 山口謡司　集英社

我々が使う現代日本語は、明治時代も後半、およそ1900年頃につくられた。いわゆる言文一致運動の産物である。自然に変化してこうなったものでなく“作られた”日本語である。日本語を使う人全員一致でつくられたものではないにせよ、これが“標準”とされた“標準語”であり、それは官報で公表され、教科書で使われて、普及することとなった。

言文一致はたったひとりでできるものではなかった。そして政府や文部省のなどが押し付けてやっても、それだけでどうにかなるものでもなかった。政府や文部省のなかにも、今のままでいいという人もいたし、日本語を捨てて英語にしてしまえという人もいたのである。

もし、こういう言い方が許されるのであれば百年後にも読まれ続けている“吾輩は猫である”を漱石に書かせたのは、新しい日本語を作ろうとした言語学者　上田万年である。聡明な漱石は“近代日本語”が公に向かって現れることを事前に知って、百年後にも読まれるための準備をし、民衆に広くウケる“吾輩は猫である”をひっさげて現れた。そして、その裏方にいたのが万年だった。万年なしに“漱石”は生まれてこなかった。

漱石の作品がこれだけ教科書に採用されるとなれば、漱石の言葉が日本語に大きな影響を与えたことは十分に考えられるであろう。

漱石の文体は、ほとんど、万年が望む言文一致体であつた。当時より現代まで、漱石の文体は古びることなく、人々の心を掴んでいるのである。

明治41年、臨時仮名遣調査委員会で大演説をし，仮名遣改正案を引っくり返した鴎外だったが、旧仮名遣いを主張した鴎外の文章は,年を追うごとに人気がなくなっていく。読み難いからである。これに対して、漱石の書くものは非常によく読まれるようになる。然しその漱石も後期３部作を書き終わると、もうまとまったものが書けなくなってしまう。ただ、漱石には漱石の文体を引き継ぐような、“木曜会”にいた弟子たちが育っていた。漱石の教員時代の教え子や漱石を慕う若手文学者たちによる、漱石邸での毎週木曜日の集まりには、小宮豊隆、鈴木三重吉、森田草平はじめ内田百間、野上弥生子、寺田寅彦、阿部次郎、安倍能成、芥川龍之介、久米正雄などが顔を出していた。彼らがその後の“日本語”を作っていく。そして鴎外も大正に入って以降は次第に、“言文一致”に近い日本語で、小説を発表するようになっていく。

2. “GHQが洗脳できなかった日本人” 山村明義　KKベストセラーズ

国家と国民にとって、もっとも大事なものの一つは何より“国語”である。なぜなら、その国に住む国民にとつて、“国語”が教育の基礎になり人間が物事を考える思考と思想の基本的土台となるからだ。又その国の歴史、文化や伝統を学ぶには本来であれば、世界のどの国の国民も“国語”を学習し、その国の“母語”で理解する必要がある。

ちなみに、言語学的な“母語”と“母国語”の違いは何か。その国の公式の公用語となっている言葉が“母国語”公用語に限

らず国民が幼少期から伝統的にずっと話してきた言葉のことを“母語”と呼ぶのである。歴史的に普通の人間は“母語”の力で思想や哲学を思索し、“母国語”はアイデアを生みだす。“母国語”は独創性を高めるのに役立ち、“母語”は思想を深める。

だから、人間としての知性を高めるには、思想の土台を育んできた“母語”が大事なのである。

ところで、日本人が中国やの韓国など他のアジア諸国民と比べてなぜ多くのノーベル賞受賞者を生みだせるのか。その理由は物理学賞を受賞した益川敏英氏によると、日本人は普段の生活では“母語”で話し、“母国語”で専門書を読む事ができるからだという。益川氏は現在の日本政府の“英語偏重教育”にも懐疑的で“専門分野の力がおろそかになったら、元も子もない”とはなしている。

確かに例えば韓国では韓国語で書かれた理科系の専門書が少なくほとんどの韓国人研究者は、英語で勉強するためにまず自分で英語を覚えなければならない。日本人は、日本語の専門書がたくさんあるので、その間に日本語に翻訳された専門書を読み、新しい智恵や発想による研究に取り組める。知的階層同士も同じ母語で話せるから、知的交流のある地方大学の研究者など中間層から人材も生まれやすい。その結果、理科系のノーベル賞受賞者は日本が21人も誕生させているのに対し、韓国は未だにゼロとなっている。

日本は“母語”と“母国語”が他国と比べて、同一的で明確化されており、極めて恵まれている国だと言えるのだ。

独立国である日本の場合、基本的に日本人の“母語”や“母国語”は大きく変えられることはなかったが、外国の力によって変革した大きな転機は過去に二度あった。一つは五世紀以来の“漢語”と21世紀の“英語”の輸入である。日本の漢字による“漢語は当時すすんでいた中国の文明の産物や、仏教などを用いるのに適していた。そのため、日本で残っている歴史書の一つである古事記は、万葉仮名という漢字からの”借字“による日本独自の仮名で構成され、日本書紀は漢語そのままで記されている。

もう一つは、日本占領下のGHQによる“国語改革”であつた。

GHQの“国語改革”には、当時から多くの日本人が反抗してきた。例えば終戦当時の文部大臣である前田多聞や安倍能成、柴田武東大教授らが“ローマ字の国字化”については徹底的に反対し、それがGHQでも“ローマ字化”を導入できなかつた大きな原動力となつた。その妥協案として、漢字の数が減らされたことは間違いないが、米国という戦勝国は敗戦国を屈服させ、日本を欧米的に変えるという“民主主義化”を推し進めていた。

3. “日本語の科学が世界を変える”
松尾義之　筑摩書房

日本人は日本語で科学をしている。実はこの話を持ち出すと、科学者を含め、大概の人から“何のことですか”と言われてしまう。じっさい、第一線の科学者に“先生は日本語で考えて科学をされているのですよね？”と持ち掛けてみるのだが、10人が10人、何のことかとキョトンとされてしまう。みなさんはどう思われるだろうか。日本人だから、日本語で話す。

だから、日本語で科学研究する。あるいは日本語で技術の研究をして、画期的な工業製品を作る。これはほんとうに当たり前のことなのだろうか。では何故日本人は、英語で科学しないのだろうか。フィリツピンやインドネシアなど東南アジアの国では、最初から英語で科学教育を進めているところが多い。何故、日本と中国だけがちがうのか。

その理由は日本語の中に、科学を自由自在に理解し創造するための用語、概念、知識、思考法までもが十二分に用意されているからである。そして、日本で生まれた成果や概念は、日本の科学者や技術者による大量の英語論文を通じて、日常的に外国に

伝達されている。だからこそ、日本の人も、外国の人も、日本人科学者が日本語で科学を創造、展開している事実に改めて注意を払わないのだ。過去、1500年以上にわたり、私たち日本人は、最初は中国文化に始まり、蘭学そして近代西欧文明と、それまで自分たちが持っていなかった新しい知識や概念や文化を積極的に取り入れてきた。言語が違うのだから、そこには必ず翻訳という行為が存在した。その際、単なる言葉の移し替えでは済まないことも多々あつたであろう。そこで新しい言葉を創造して概念知識や思想哲学まできちんと吸収したのだ。だからこそ、例えば今日の科学において、自由に新しい成果を生み出す言語環境が整つたのだ。

さて、湯川博士の中間子と日本語の関係についてである。著書である“旅人――ある物理學者の“回想”や“湯川秀樹日記――昭和９年：中間子論への道”などを見れば湯川博士の核力の謎に挑む苦闘が手に取るように推察できるのだが、それは物理学者として個人の営みであって日本語とか日本人とかいった特別の理由があるようには感じられない。ただ、時の大阪帝国大学物理學科の菊池正士教授や坂田昌一講師と、中間子論についての議論を深めたと思われることが日記に残されている。湯川理論の誕生において、取り立てて日本語の存在がおおきかつたのかどうかはわからない。しかし当時の日本の優れた物理学者との日本語による議論が、大きな貢献ないしは影響を与えたであろうことは間違いない。肝心な物理学の議論が日本語で自由に行われ日本語の物理学が展開されたわけだ。東京の理化学研究所にいた仁科芳雄博士や京大時代の同級生の朝永振一郎博士などとも議論を重ねたという。それ以外にも、まさにキラ星のような物理の研究者が、当時の日本にはいたのだ。実際の議論はおそらく、日本語と英語とドイツ語がちゃんぽんになり、黒板に数式が書き連ねられたであろう。

ハンチントンは“文明の衝突”の中で日本を世界の八大文明の中の一つとして捉えている。日本語を通してあらためて、その重みを感じた。

Nmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnm

会員寄稿文

『ミステリ小説断想』(5)

福　冨　直　明

1. 誤訳

レイモンド・チャンドラーの『大いなる眠り』の第２章で、スターンウッド将軍が私立探偵のフィリップ・マーロウにA・G・ガイガーが送ってきた封筒を見せる。封筒には、将軍の娘のカーメンが署名した借用書と、ガイガーの名刺が入っていて、名刺の裏には次のようなメッセージが書いてあった。

“Dear Sir: In spite of the legal uncollectibility of the enclosed, which frankly represent gambling debts, I assume you might wish them honored. Respectfully,　A. G. Geiger”

この文章は双葉十三郎さん訳（創元推理文庫 1959）では、

〈拝啓　同封の書類は賭博場における借用証であります。法律的には返済請求不可能ではありますが、貴殿のご名誉を保持せられるため、正当なものとおみとめくだされば幸甚です。後略。A・G・ガ

イガー〉

となっている。Respectfullyは儀礼的な手紙の締めくくりの決まり文句の一つで、敬具とか不一に相当する言葉である。それがどうして〈後略〉になったのか不思議で、誤訳というよりはミスプリとしか思えない。問題は’honored’を〈名誉〉と関連のある言葉と解釈していることだ。ここで言うhonorは商用語で、小切手や手形を決済する、約束した支払いを実行すると言った意味であり、ガイガーは、あの博打の借金を清算なさりたいだろうと思いましてと言っているので、将軍の名誉のことではない。

借金返済の催促の手紙に相手の借用書も添付して送ってしまっては、金を貸していた証拠がなくなってしまうから、ガイガーが借用書を送ってきたのは一見妙なのだが、博打の借金そのものが法的には返済請求不可能なのだから、借用書をとったこと自体が無意味であり、ガイガーはその借用書がただの紙切れ同然と知りながら、借用書に署名させたと思われる。その時点で既に将軍を強請ろうと企んでいたわけだ。将軍が面子、つまり〈名誉〉を考えて娘の借金を肩代わりすると考えた。訳者はこんな思考経路をたどって、honorは〈名誉〉の意味と解して翻訳したようだ。

ノーベル賞候補の作家としてしばしば名前の挙がる村上春樹さんもチャンドラー作品が大好きだそうで、『大いなる眠り』も2012年に翻訳している。ガイガーのメッセージをどう訳しているのかと見てみると、

「拝啓。同封せしものは、率直に申せば賭博の負債であります。法的には回収不能なるものの，貴下におかれましては、あるいは名誉を重んじられるのではあるまいかと愚考いたした次第です。敬具。
A・G・ガイガー」

歴史は繰り返す。またしても〈名誉〉になってしまった。また、村上訳では「拝啓。」「敬具。」といった具合に句点のマルが付いているのが奇妙だ。

2. どうでもいい話

80年代の後半から雑誌などに海外ミステリ小説の評論を書くようになり、それがいわば専門分野なのだが、ニチメンの会報の原稿依頼の場合は内容の指定がない。つまり、何を書いてもいいわけなので、どうでもいいような話を書いてみようかと思い付いた。

どうでもいい話なんかでは困ると会報編集局諸兄がお考えならば、以下の原稿を没になさっても構いません。

例えば、ラーメンには焼き海苔が一枚乗って来る。トッピングとして注文すれば数枚だ。

あの焼き海苔はまだパリッとしているうちに食べるべきなのか、それともつゆにどっぷり漬けてしまってドロドロにして食べるべきなのか。ラーメンに海苔を乗せるというのは、たぶん，ざる蕎麦から派生したアイデアだろうが、果たして焼き海苔はラーメンに合うか。

ちょっと気の利いた洋食屋でカレーを頼むと、らっきょうと福神漬けと青菜の漬物をいれたガラスの容器が付いてくる。二、三人で昼食に行って一人がカレーを注文し、他の二人がナポリタンを注文したとする。あのらっきょうはカレーの随伴物である。

ところが、ナポリタンを注文しておきながら、らっきょうを勝手によそって食べる輩がいる。彼にはらっきょうを食べる権利はないはずだ。極端な例として、十人で昼食に行って、カレーを注文したのが一人だけ、残りの九人がパスタや焼肉を注文していながら、らっきょうも食べたら、容器は空になり、店は無銭飲食の被害に遭ったようなものだ。

もっとも、現実的には、店は、あんたらはらっきょうを食べるなとは言い難いから、耐え難きを耐えるしかない。

イヌイット語では雪を表現する言葉が五

百語あると言われるが、学者によると五千語から二万語あり、しかし日常的に使われているのは三十語程度なのだそうだ。これと対照的にウルドウ語やヒンディ語では雪と氷が同じ言葉である。空から降って来るのも、ウイスキーの水割りに使うのも、同じbarfという単語だ。また、明日と昨日、明後日と一昨日が同じ単語で、今日を起点に一日前後、二日前後という考え方らしい。

作り話のように聞こえるかも知れないが、英語が達者でないpeonクラスの現地雇員が「おととい休暇を取りたいのですが」と言いに来たりする。

面白いのは、私は腹が減った・のどが渇いた・怖くなったなどの表現を直訳すると、空腹・渇き・恐怖が私にくっついたという言い方をする。こういう現象が自分の体内にあるものではなくて、体の外側から付着してくると考えているかのようだ。

もっとも日本語でも“眠気が襲ってきた”と言ったりするが。

遺言書には当人の署名捺印が必要だが、判子の代わりに拇印でもよいことになっていると聞いて、葬式のあと遺言書を開封した場合、判子でなくて拇印だったら、それが当人の拇印であるのか、どうやって確認するのかと思った。まさか親指だけ冷蔵庫にでも保管して置くのか。その場合でもそれが当人の親指であることを証明する手続きが必要だろう。推理小説的に言えば、遺言者が常用していたデスクや書籍、日用品などから採取した指紋と照合する方法があるだろうが、指紋の採取・照合って、どこに依頼すればいいのか。

目玉焼きの正しい食べ方というのはあるのか。

茹で卵の正しい食べ方というのはあって、全寮制の英国立教学院では、ナイフとスプーンを使った正しい食べ方を教えてくれる。うちでは目玉焼きを食べるときは、白身の外側から食べて行って、最後に残った黄身をすくって口に入れる。

アメリカにかなり長い間住んでいたから目玉焼きを食べる人を何度も見ているはずなのに、探求心に欠けていたのか、記憶にない。一度だけ、田舎の食堂で隣席のじいさんが目玉焼きをフォークの先で格子状に２センチ角くらいに滅多切りにして、白身と黄身を丹念に混ぜ合わせてから食べ始めるのを目撃した。その熟練した手つきはほとんど感動的であり、美味しそうに見えた。しかし、この食べ方だと、食べ終わったときの皿が汚く見える。では、目玉焼きの正しい食べ方はあるのかとネットを見てみたら、同じ疑問を持つ人が結構沢山いるらしいのを発見した。故伊丹十三氏は「目玉焼きの正しい食べ方」と題するエッセイを書いている。短い文章なので本屋で立ち読みしたが、正しい食べ方を解説したものではなく、どうするのが正しい食べ方なのか研究している友人の話を書いたユーモラスなエッセイだった。2014年にはＮＨＫが「目玉焼きの黄身はいつつぶす」という連続アニメを放映したとのことだ。エリザベス女王はどんな風に食べておられるのか。

おそらく黄身の固い目玉焼きを召し上がっておられるのだと思う。これなら皿が汚れない。

これも、どうでもいい話だが、小泉八雲は芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」を英訳するとき、あの蛙は一匹か複数か迷ったそうである。静寂さの強調なのだから一匹だと考えるのが普通のようだが、しばらくしてからまたもう一匹飛び込む音が聞こえても、静寂さはやはり身にしみる。結局、八雲は複数で英訳し、ドナルド・キーンは単数で訳した。

どちらが正しいか、判定は俳人各位にお任せします。

会員寄稿文

「AIIB」の世銀、アジア開発銀行、欧州開発銀行などとの協調融資、並びに「一帯一路」戦略の現状とその歴史的な背景

中　川　十　郎

「アジアインフラ投資銀行（AIIB）の現状」

本年１月に57か国で発足した「アジアインフラ投資銀行」（AIIB）はこのほど世界銀行と初の協調融資の枠組みで合意し、４月13日ワシントンの世銀本部で世銀キム総裁とAIIB金立群・総裁が署名した。AIIBは今年、約12億ドル（約1300億円）の融資を予定しており、そのうちの大部分が世銀との協調融資になる見込みだとのことである。（朝日新聞　４月14日）

AIIBは中央アジア、南、東アジアの交通、水、エネルギー事業などへの融資を検討中で、近く１号案件を発表するという。AIIBは６月25~26日に初の年次総会を北京で開催。第一号案件として４件程度を公表する見込みという。（日経2016年６月22日）

融資案件としてはパキスタンの高速道路にアジア開発銀行（ADB）と、タジキスタンの高速道路には欧州復興開発銀行（EBRD）と協調融資することを内定している模様。さらに単独でバングラデシュの案件に融資することを検討中とのことだ。

パキスタンは中国が伝統的に外交面で重視。一方、タジキスタンは「一帯一路（新シルクロード）」構想の沿線国で、中國が重視している国である。

AIIBの融資姿勢は手堅い。たとえばADBとの協調融資では、いったんADBにお金を預けてADBがまとめて融資し、貸し倒れのリスクを直接取らない慎重な融資姿勢だ。しかも融資対象は政府案件を中心として、民間主体の案件には手を出さないと見られている。2016年の融資目標は合計12億ドル（約1200億円）と控えめだ。まずは中国が国際機関を運営できることを重視し融資の焦げ付きを避ける狙いとみられている。（日経2016年６月22日）

一方、金総裁は世銀との協調融資も目指しており、「世銀との緊密な連携で、世銀から学ぶことは多い」と語り、世銀の担当者は「世銀は幹部クラスから現場の担当者までAIIBと深くかかわってきた」と発言。今後、世銀とAIIBとの関係強化が見込まれる。

中国はアジア、中東、アフリカ、欧州を結ぶ経済圏「一帯一路」構想も推進中である。今後AIIBは道路、鉄道など物流面や、発電所、各種プラントなどへの資金供給、融資などで活躍するものと思われる。

３月14日に初の東京事務所を設置した欧州復興開発銀行（EBRD）は欧州や中東で経済支援を手掛けているが、EBRDのスマ・チャクラバテイ総裁は中国が主導するAIIBと年内に少なくとも中央アジアで２つの融資案件を進めることを明らかにしている。（日経３月10日）　EBRDはこれまで、旧ソ連圏や中東欧を中心に支援してきたが、今後は中東・北アフリカ、ギリシア、中央アジアなどでのインフラに融資する方向である。そのため、本年１月にEBRDに加盟した中国との関係強化を目指しているものと思われる。これにより中国側も欧州と「一帯一路」構想も含め、欧州との結びつきを強め、協調融資がさらに増えるだろう。

EBRDのチャクラバテイ総裁は「新シルクロード構想はEBRDが力を入れるカザフスタンなど中央アジア諸国とも密接に絡んでおり、中國企業と共同で投資を進める。EBRDやアジア開発銀行（ADB)、世界銀行だけでは、アジアや中東などの膨大なインフラ需要にこたえられないと話し、AIIBと積極的に協業する姿勢を示した」という。（日経３月10日）

アジア新興国では鉄道や電力供給網などの建設に多額の資金が必要で、ADBによると2010～2020年に約８兆ドル（約900兆円）のインフラ需要がある。だが、ADBや世界銀行など既存の国際機関の融資額はその数パーセントにとどまっている。

世銀は資本金2230億ドルだが、融資できるのはせいぜい年間500億ドルで、発展途上国の最低年間１兆ドルのインフラ建設需要の５％しか満たせていない現状である。（The　Pacific Review 2016年 7 月 号436ページ）

かかる状況下、今後AIIBと世銀や、EBRDとの協調融資はさらに増えるものと思われる。しかしADB最大の株主で総裁を毎回出している日本はAIIBの融資基準が不透明だとしてAIIBに批判的で、米国に同調してAIIBには参加していない。逆にAIIBに対抗し、日本の財務省やJICAは中南米とアジアのインフラを取り込もうと米州開発銀行（IDB）と連携することを４月10日に合意。日本政府が出資しIDB内に500万ドル（約５億円）の基金を設けた。ADBとアジアのインフラで連携し、IDBと協力し、AIIBに対抗し世界全域のインフラ投資を主導する体制を整える。日本政府は今後アジアのインフラ投資に数年間で1100億ドルを投じる見込みだ。日本としてはAIIBに対抗するのでなくAIIBと協力することを第一義とすべきだ。世界第２位のGDPを誇る一衣帯水の中国とアジアでのウイン･ウイン関係を強化すべきではないか。

「AIIBと一帯一路」戦略

唐時代の中国がシルクロードを経由し中国のシルク（絹）を陸路で西方へ輸送したのに対し、21世紀の中国の「一帯一路」シルクロード構想は中央アジア、ロシアを中心に石油、ガスなど経済発展の血液であるエネルギ - を西から東へ輸送する。さらに陸路のみでなく、海上輸送網も構築し、陸海でのサプライ・チェーンの強化で貿易の拡大を目指してる遠大な構想だ。そのための道路、港湾、空港建設、発電所などのインフラ建設で「一帯一路」プロジェクトへAIIBが融資することで、AIIBと「一帯一路」物流戦略は一体となり中国からアジア、中央アジア、中東、アフリカ、ヨーロッパへの貿易拡大に甚大な効果を発揮する21世紀のグローバル戦略だ。

日本はアメリカと共にAIIBは中国主導で透明性にかけ、企業統治上も問題だと批判して、AIIBに参加していない。AIIBにはヨーロッパ諸国をはじめとして先進国、発展途上国の57か国が参加。さらに30カ国が参加を検討中という。隣の国に将来性のある国際金融機関が

発足し、国際的な融資活動を開始するというのに、AIIBへの参加を拒む対応では日本は悔いを千載に残すこととなり、あまりにも近視眼的対応ではないか。日本は米国と共にADBの最大の株主で、AIIBがADBの競争相手で、ADBは創立以来、総裁を日本が独占しており、AIIBはADBの競争相手とみなし、参加を拒否しているが日本としては100年の中長期的に大所、高所から判断し、AIIBへの参加を真剣に考究すべきだ。さもなくば悔いを千載に残すことになるだろう。

中国はAIIBに加え、400億ドルのシルクロード基金、500億ドルのBRICS銀行、SCO

銀行などにも参加し、中央アジア、ブラジル、ロシア、インド、南アなどの大型プロジェクトへの融資も模索している。上海協力機構（SCO）には2015年7月、アジアの大国、インドとパキスタンの参加が決定し、参加国人口30億人の巨大組織が中央アジアに誕生した。

日本としては将来発展するSCOとの関係も強化すべきと思われる。

「AIIBとTPP」

安倍内閣はAIIBに対抗しTPPの国会批准に尽力中だ。さる6月6日、帝国ホテルで開催の米国CSIS（国際戦略研究所）の講演で米国側はTPPは中国への経済、軍事面の対抗措置だとの見解を表明した。米国はアジアへのPIVOT戦略で日本を要に対中国戦略を目指しているようだが、日本はアジアの一員として、発展する中國、韓国との経済面で日中韓FTAの早期締結、さらにインド、豪州、ニュージーランドを加えたASEAN+ 6のRCEP（東アジア包括的経済連携）の実現に尽力することこそ肝心である。

TPPはバックにある「TPPを推進する米多国籍企業の会」100社の企業益、米国の国益中心の環太平洋経済連携協定である。米国の大統領候補の民主党クリントン氏、共和党トランプ氏ともTPPについては反対を表明している。日本は日本の国益を第一にTPPについては、拙速を戒め、慎重に対応することが肝心だ。

21世紀のアジアの時代を迎え、日本としてはまず世界の57カ国のメンバーからなるAIIBに参加することを強く訴えたい。

さもなくば、世界で孤立するのではないか。

「ユーラシア地政学の観点から見たAIIB」

英国の有名な地理学者マッキンダーは『ユーラシアの心臓部（中核）を制する者が世界を制する』との理論を打ち出した。

一方、米国の国際政治学者スパイクマンは『ユーラシア大陸の周辺沿岸部（リムランド）を制する者はユーラシアを制し、ユーラシアを制する者は世界を制する』と唱えた。

20世紀に入り、カーター大統領元補佐官のブレジンスキーは『地球上でもっとも重要な舞台のユーラシア大陸への積極的関与が、米国の覇権維持のためには必須だ』と喝破し、米国のユーラシアへの関与を強く進言した。

ブレジンスキーはユーラシアを地政学的「チェス盤」ととらえ、米、仏、独，露、中，印の6カ国を「主要プレイヤー」とし、「要衝国」をウクライナ、アゼルバイジャン、トルコ、イラン、韓国の5か国。「準要衝国」としてカザフスタン、ウスベキスタン、パキスタン、タイ、台湾の5か国を選んでいる。プレジンスキーはさらにユーラシアを西（欧州）、中央（ロシア、シベリア地域）、南（中東、中央アジア）、東（アジア）に分け西はNATO,

東は日米安保でコントロールし、南（中東、中央アジア）を制することの重要性を強調している。（石郷岡　健（2004）『ユーラシアの地政学』166ページ）

かかる地政学の観点からも、日本としては中央アジアを重視し、SCO、AIIBなどへの協力、加入を戦略的に考究することが肝要であろう。

「情報の操作」

中国・習近平指導部が進めるインフラ輸出が難航している。米中西部の高速鉄道事業が合弁解消に追い込まれた。アジアや中南米でも同様のトラブルが相次いでいる。海外進出を成長の柱に据える国家戦略に影が差し始めた。（日経2016年6月22日）

AIIBについては日本のメデイアは中国主導で、透明性がなく、中国の在庫のはけ口に活用しようとしている（日経同上）などと中国のグローバル戦略、AIIBを批判し

ている。

一方、財務省大臣官房の「TPP協定と我が国の貿易」（2016年5月17日）によれば「TPPの我が国にとっての経済効果は、実質GDPを2．59％（約14兆円）押し上げ、雇用を1．25％（約80万人）増加させる見込み」と何年でこのような効果が出るのか数字を表示しないでバラ色の楽観論を吹聴している。雇用も正社員なのか、非正規社員も含むのか、肝心の情報をはっきり明示していない。最近安倍内閣に遠慮している日本のメデイアはTPPの効果の楽観的な論調を掲げている。AIIBについても同じで、批判的論調が多い。われわれが研究を進めるに際しては、資料や論調に自己の主張を強調するために都合の良い情報を強調し、情報操作しているケースが多くなっている。関係機関やメデイアの情報操作には十分注意し、自分で資料、統計を慎重に精査し、情報操作されない情報収集力、分析力、活用力を日頃から身に着ける努力をすることが情報論的に見て肝心である。そのためには信用できる専門家の人的情報（Human Intelligence）を入手することが大切だ。日頃から信用できる情報源を確立し、人脈をしっかり構築することが最も重要である。

Nmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnm

会員寄稿文

米大統領選に異文化Showを見る

浜　地　道　雄

いよいよの米大統領選（11月8日）。

本稿が活字になる時にはすでに決着はついてるわけだが、「後出しジャンケン」はすまいと決めている筆者としては、この原稿時点で「ヒラリー・クリントン選出」と断言しておく。

もっとも、先の英国のEU離脱にしても、コロンビア（サントス大統領＝ノーベル平和賞受賞）の和平調停否決にしても、国民投票が予想と違うというケースはあるわけだがー。

年初来続いているこの長い米大統領選挙戦。

ヒラリー・クリントン候補の健康問題はともかく、ドナルド・トランプ候補の暴言の数々は従来のアメリカの規範、PC（Political Correctness）からすると考えられない現象だ。そのTV討論会などを見ているとまるでParty（本来「政党」だが米語でどんちゃん騒ぎ）、否、Show見世物だ。醜い舌戦が終わると握手。ビジネス交渉の見本とは言えないが、アメリカ人気質を見ることが出来る。

とにかくわかりにくい選挙制度だが、以下に見るごとくまさに（歴史に支えられた）「異文化」と言える。

まず、11月8日（火曜日）の本選挙結果で、次期大統領が決まる（と言われている）。だがこれは正式ではない。確かにこの日には選挙人Elector団が選ばれ、これを（United States Electoral）Collegeという。「大学」の意味ではなく、語源Colleague仲間だ。

ところが彼らが「投票」するのは12月半ば。

それで決まりかと思うとさにあらず、このCollege選の結果は翌2017年1月6日、連邦議会で開票されるまで待たねばならない。そこで選ばれた者が晴れて次期大統領として、1月20日正午、最高裁判所長官の立会いのもとに、So help me Godと宣誓Oathしてはじめて正式になる。

選挙から誕生まで3ヶ月近くかかるという理由がここにある。交通・通信が発達し

ていなかった時代、全国の票を短期間で集計することができなかったことの名残だ。

そもそも、米大統領選挙は4年に一度、オリンピックの開催されるうるう年Leapの11月の「最初の月曜日の翌日、火曜日」だ。なぜこんな持って回った言い方になるかというと、11月1日が火曜日の場合10月の決算で忙しいからだという説がある。

では、なぜ日本のように日曜日ではなく、火曜日なのか？

日曜日は安息日で、仕事（公務）をする日ではない。広い州では月曜日に馬車で出発して、火曜日に投票所に到着するという歴史がある。

選挙戦の始まり1月から6月、各州でのPrimary（なぜか「予備」と訳される）選挙、または党員集会(コーカスCaucus)で選挙人を選ぶ。

そして2月か3月のはじめがSuper Tuesdayだ。Superとは「大きい」だから、本選挙（11月）をスーパーというのかと思うが違う。

カリフォルニアなど選挙人の多い州で予備選挙が行われ、そこで最多数票を得た党がすべてを獲得するWinner-take-all方式で、大勢を決する重要選挙だからSuperと呼ばれる。そして、夏の各党大会で「候補」が決まる。

米国では不思議なことに副大統領の存在感があまりない。が、大統領任期4年間の間にもしものことがあれば、直ちに副大統領が昇格する。

1963年11月22日、時の大統領JFケネディーがダラスで凶弾に倒れた時、僅か数時間後、ジャクリーヌ未亡人が血痕のついた洋服のまま、専用機の中でジョンソン副大統領の昇格就任式に立ち会った図は脳裏に焼き付いている。

夏の党大会で、それぞれ副大統領候補（Running Mate）をも決めるが、この正・副の組合せをTicketという。民主党はヴァージニア州選出のTim Kaine上院議員を、共和党はインディアナ州のMike Pence知事を指名した。

さあ、このTicket（切符）は新年、どういうShow（展開）を見せてくれるか？

（一社）日本在外企業協会　「月刊グローバル経営」誌より、転載、加筆

Nmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnm

会員寄稿文

南　緬　紀　行　記

高　尾　　勝

Myanmar
国名：Republic of the Union of Myanmar
首都：ネピドー（2006年10月Yangonから遷都）
人口：5,326万人
国土：67.8万平方㎞（日本の約1.8倍）
地勢：インドシナ半島西部に位置し、北東に中国、東にラオス、南東に泰、西にバングラデッシュ、北西にインド、と5カ国に隣接する。

訪緬に先立ち、東京駅丸の内の丸善書店に行って、‘ビルマ関係の本を1－2冊求めたい’と女店員に声をかけたら、キョトン。慌てて‘ミヤンマー関係’と言い直したら通じた。

インパール作戦で敗れイラワジ河を渡って日本軍敗走の記録、1948年の竹山道雄著「ビルマの竪琴」と1956年の市川崑監督の第

１回映画化（1985年に２回目の映画化をしている）、いずれも物語的に頭に残っているがビルマを現実的に意識するようになったのはいつ頃のことだろう？

1959年ニチメンに入社して東京支社繊維原料部パルプ課に配属され、鶴崎パルプ（大分県所在）のパルプを扱ったことから、温厚な松岡社長（元ニチメン常務）の面識を得た。後日ニチメン社史で第二次大戦中松岡さんがビルマで奮闘されたことを知り、なにがしかの感慨に耽ったことが最初だと思う。

恒例になっているが、システムコンサルタント後田専務のご厚意で、Kuala Lumpur経由でインドBangaloreとミヤンマーを訪れた。一行はシスコン木下仁社長、後田勝彦専務。

ヤンゴンに直行先着の河野方美シスコン顧問が合流して４名。木下社長と私は初訪緬、他方、河野氏は今回が22回目の訪緬の由で彼の地に通暁、ミヤンマー訪問の計画立案は彼任せだった。

10月11日（火）午前中成田発　マレーシア・インドを経由して10月15日（土）11:15.ヤンゴン空港着

河野氏の出迎えを受け, Perfect Transportation ServiceのChan Ko社長自ら運転する車で市内に向かう。途中アウンサン・スーチー女史宅の近くなどを経由して市の中心部に在るシュエダゴン・パゴダ（Shwedagon Pagoda）を見学した、入場料は外国人価格8,000チャット（約1,000円）。

大学は自動車部麻雀学科卒ゆえ無意識の内に自動車と道路に目が移る。右側通行で自動車は右ハンドルに仰天、追い越しなどに不便だろうに・・と考える。まだ国産車はない筈で、街を走る車は全部と云っても良いほど日本製の中古車で、その殆んどがトヨタ。以前は盤谷などでもよく見かけたものだが、日本で使われていた時代のペンキ文字はそのまま残されて品質保証の証になっている由で、中古車ながら良く手入れされている。４泊５日の滞緬中、左ハンドル車を３台見かけた、アメ車jeep、ベンツ乗用車、起亜社製バス。後日友人に聞いた話では、クラウンクラスが約300万円相当で、中古車輸入業者はボロ儲けしている由。

大小60余の仏塔に囲まれた大仏塔シュエダゴンパゴダ、南緬の寺院でも同じだったが素足を要求された。ミヤンマーの伝統暦８曜日、生まれた日の曜日を司る仏像が鎮座まします祠があり、床に座り込んで仏像にお祈りしているのは女性が殆んどで、正座ではなく、全員が横座り。私の誕生日は

日曜だが、お祈りを失念。

次いでボージョー・アウンサン・マーケットに行き、河野顧問馴染みの店で腕輪を数個買い求める。１個＄１、相手が喜ぶかどうかは分からないが土産としてばら撒くには好適。

日本人女性 林真紀氏が経営する人材育成 会 社Infinity Information development Co., Ltd を表敬訪問後Jasmine Palace Hotelにチェックイン。

日本食レストラン‘Fuji’ でDiamond Voyage社経営者Than Winn夫妻、Chan社長、と夕食。ご夫妻は’忘れた’とは言いながらも日本語が達者。

10月16日（日）08:30 ホテル発、Chan社長の運転する車でThai国境に近い港湾都市モウラミヤイン（Maulamyine、モン州の州都、人口30万）に向かう。チベットに源を発する大河サルウイン河がマルタバン湾に注ぐ地に在り、ヤンゴンから走行距離約300ｋｍ（東南方向直線距離約170㎞）。

ヤンゴン市内からいったん北上して右折、カイン州の端をかすめてモン州に入る。モン州地方部の古い民家には床の高さ1.5－２米の高床式木造住宅が散見される、床下は物置などに利用しているようだ。行き交う乗り物と人波でごった返すモウラミヤイン市内の高台にある寺院を見物して、サルウイン河畔の展望所で緑の多い市街と大河の対岸を展望する。夕方ホテルにチェックイン。

10月17日（月）08:30ホテル発、ムドン（Mudon）経由南へ64ｋｍタンビュッザヤ（Thanbyuzayat）に移動。ムドンの南郊外にミヤンマー最大の寝釈迦像（ウインセイントーヤ）があり、道すがら道路脇に托鉢僧の像500体がある。ムドンには畑と荒野になってしまった小説「ビルマの竪琴」収容所跡がある。資料によると著者竹山道雄元東大独文教授は著述に当たって訪緬の経験なし、の由。

タンビュッザヤは旧泰緬鉄道の緬側起点で、郊外にはJapan Pagodaがあり、死の鉄道博物館（The Death Railway Museum）がある。日本寺の庭には、緬側鉄道工事に従事した第五連隊長 佐々木万之助大佐揮毫の慰霊碑があり、鉄道建設殉難者を慰霊する、とある。

殉難者にはビルマ人も含まれると解せるのが慰めだろう。

夕刻カチン州の州都パアン（Hpa-an）のホテルにチェックイン。夕食を摂るべく18:00過ぎに町のレストランに入ったら、おかずが殆んど無くなったので と入店をことわられ、やむなくホテルに戻ってホテル

の食堂で夕食を摂る。

旧泰緬鉄道：添付写真参照、泰パンポンと緬タンビュッザヤ415㎞を結ぶ鉄道線、現在 泰側パンポンとナムトクの間はジーゼルカーが走っているが、残りは廃線。

日本軍は一時アンダマン・ニコバル諸島を占領し、Sri Lankaのコロンボを砲撃したこともあるが、時間を置かずしてインド洋の制海権を喪失し、ビルマへの安全な輸送路として1942年に泰・緬両端で工事同時着工、1943年10月に完工。

工事には、日本軍工兵隊12,000人の他に膨大な労力投入の人海戦術で一気呵成に完成した、日、泰、ビルマ、の調査数値に若干の違いはあるが、コレラ・マラリアなどの猖獗する疫病と飢餓で約半数が死亡したと云われる。使役労働力は、 捕虜62,000人（内白人12,619人死亡）、労働者 ：泰人 数万人、ビルマ人18万人（内４万人死亡）、マレー人 ８万人、インドネシア人 4.5万人。

カンチャナブリの緬寄りの地が、映画「戦場に掛ける橋」の舞台だが、鉄材の乏しい日本軍は木材で橋梁を作ったが、映画は鉄材橋梁などで真実と程遠いとの評がある。

カンチャナブリ在のKarnapuli Pulp and Paper社に1962年頃から国策パルプ社のパルプを納入開始、pulp拡販の為 担当者の私が1964年に訪泰した経験があるが、当時は泰緬鉄道は話題にもなっていなかった。

戦中の友好国泰と敵英国では泰緬鉄道への反応も対照的。資料館の名称は泰では「Thailand Burma Railway Centre」戦後泰政府は使用蒸気機関車２両を日本に返還（靖国神社などに保管）、ミヤンマーでは「The Death Railway Museum」で、博物館の庭にはC型蒸気機関車と飢餓であばら骨が浮いた労働者の像、英国の怨念を示すのではないだろうか。

尚、当該橋完成１年後に着任し、捕虜など虐待に無関係の筈の塩田源二中尉がBC戦犯として死刑になった。

10月18日（火）パアン市内見物後、平地にツエッガビン山（Mt. Zwegabin）など不思議な形の石灰岩が立つチャウッカラツ寺院（Kyauk Ka Lat）、無数の仏像が刻まれた洞窟寺院（Kaw Goon Cave）, カンターヤー湖（Kan Thar Yar Lake）などを見物後夕刻Yangonに戻り、15日に投宿したジャスミン・パレス・ホテルにチェックイン。

私の友人、大久保賢一さんが合流して日本レストラン‘サクラ’で夕食。大久保さんは伊藤忠商事のムンバイ、コルカタ支店長を経て、富士電機ムンバイ所長に転出、インド滞在歴20年余。現在富士電機ヤンゴン所長を務める。

10月19日、12:15ヤンゴン空港発, Kuala Lumpur経由、10月20日、07:40　成田着、帰国す。

寺院などでもたついていると 手を差し伸べようとするご婦人達、ミヤンマーの人々の温容さが印象に残る旅だった。同じモンゴロイドと云う先入観が作用するのか、インドなど南アジアに比べ、不潔感を感じることが少なかった。

註　表示時刻はいずれも現地時間
因みに、東京比、マレーシアは１時間、ミヤンマー２時間、インド３時間半遅れ

今年の九月、満八十歳を迎えました。長谷川さんのお誘いを受け、何を書くか考えた末に、敗戦の近づく数年の身辺を触れることにしました。読んで頂ければ幸いです。

会員寄稿文

今「平和」とは何か
―……パクス・ロマーナとパクス・アメリカーナ……そして「パクス・ジャポニカ」のすすめ（上）

竹　内　可　能

この歳になってトルストイの「戦争と平和」を読み直す気力はない。がしかしせめて哲学者カントの小冊子「永遠平和のために」（池内紀・訳）ならとばかり、今読み終えたところである。昨年のこと安保法制問題で国会が紛糾していらい、憲法についての国論が二分され国民の非常な関心の高まりを感じないわけにゆかなかった。遅ればせながら私もわたしなりの「平和論」をまとめてここに記してみたいと思う所以である。

「平和」（peace）の語源

さて日本語の「平和」についてだが、これはWikipediaによると明治時代になって英語の「peace」の訳語として導入されたものという。それもわが国には古来漢語の「和平」という言葉はあったところから，訳者はそのままこの言葉をさかさまにして「平和」としたらしい。

なかなか粋な訳語ではないかと思いながら英語の「peace」を辞書で引くと、その意味として（1）平和（2）和平（3）秩序（4）平穏といった具合の記載がある。興味深いことに英語のpeaceにはそもそも「和平」という意味が含まれているのである。さすがにややこしい誤解をさけるためか英語で和平（講和）を表す場合は、「the Peace」という風にPを大文字にして識別することが多いようである。

今度は日本語の「平和」を辞書に引いてみると（広辞苑）、そこには（1）戦争のない状態で世が平穏であること（2）心安らかにやわらぐこと、おだやかで変りないこと、とある。

以上は一見してあたりまえのような説明だが、わたしはあらためてわが国には古来明治期に至るまで、「平和」という概念そのもののなかったことに気づかされた思いであった。つまり日本人にとってはその昔から「心安らかな」とか「おだやかな」といった、助動詞的な心情の平穏を意味する言葉なら日常茶飯事だったが、「戦争がない状態で世が平穏である」といった、戦争との関連において社会的な「平和」の概念は皆無だったにちがいない。

以上わが国では、社会的な平和の概念のないところに名詞の「平和」という言葉はありようもなかったという点でまことに興味深いわけだが、ならば西欧に発する「peace」という言葉はどうなのか。ふたたびWikipediaをみると、この言葉の語源はラテン語の「pax」(パクス)だったことがわかる。しかもこの「パクス」が古フランス語の「pais」となって、西暦800～1300年ごろ北部フランス地方で使用されていたのだという。

ところでそのラテン語の「pax」だが、どうやらpeaceの語源としてのこの言葉には、「平定」とか「支配」といった謂わば「力の論理」によって、あらたにくみ敷かれることになる「秩序」（平和）というほどの含意があるというのである。

以下は素人考えの私の推論にわたるが、上述のラテン語「パクス」の含意とされる

ものが、実は古代ローマ時代のパクスつまり「社会的な平和」の概念そのものではなかったかと考えている。

偶々わたしの僚友でスペイン語にも精通している旧商社マン氏によれば、現代スペイン語で「pais」は「国家」を意味するという。遠くラテン語の「pax」(平和)がフランク王国を経て、イベリア半島では古来「国家」の意味で引き継がれてきたとすれば、“「力の論理」を行使して「平和」をもたらす「国家」”という意味で、わたしの推論の傍証かとも思える。

Pax　Romana（パクス・ロマーナ）「ローマによる平和」について

「パクス・ロマーナ」というラテン語は、「ローマ帝国衰亡史」で高名な18世紀の英国の歴史家エドワード・ギボンによる造語だといわれる。世界史の中で「平和」を語るのはギボンをもって嚆矢と思われるのは、啓蒙の時代と言われながら戦争に明け暮れした18世紀、「自由・平等」や「理性」とならんでルソーとかカントといった思想家や哲学者が「平和」について考え始めていたことと無縁ではあるまい。

史家ギボンがローマ帝国というとき、彼が心に描いていたのはカエサル、アウグストゥスによる帝政のはじまりから五賢帝のおわりころまでの、およそ180年間の時代だったという。

彼はこの時代を「人類史上もっとも幸福な時代」として尊崇し讃仰したといわれている。しかしわたしは彼の「パクス」には二つ疑問を感じている。

その一つは彼の言う「パクス」という言葉の由来についてである。

一説によるとこれはローマにおける「平和の女神」だとされているが、これは疑わしい。

ローマには今も平和の女神像が立てられているらしいが、それは後代の人の手になるものであることは、古代ローマにそのような女神が神話や信仰の主だった対象であった形跡がないことでも明らかなことだ。それは現在でもニューヨークのマンハッタンの近くの島に立つ「自由の女神」のようなもので（アメリカの独立を記念して、フランスが贈ったもの）、今も昔もそれは信仰の対象とは無縁なのである。

多分史家ギボンの古代ローマへの憧憬が醸し出した幻影だったのではなかろうか。

第二の疑問点について、古代ローマといえば神々の多いことで有名だが、とりわけ最高神ユピテル（ジュピター）とともに戦神マルスが、市民の間で圧倒的な人気のあったこことは特筆に値しよう。なぜといってその答えは簡単であった。ギボンがいう五賢帝時代までのローマにかぎるなら、ローマ市民にとって戦争（戦勝）こそが最大の関心事だったのは、それだけ戦争はペイ（pay）したからに他ならない。彼らにとっては戦争に賭け戦勝を祈念することは、座して平穏に期するよりははるかに現実的だったのだ。実際この時代の市民にとって帝国の版図は常在戦場といえたが、戦争は戦勝を意味したも同然であった。度重なる皇帝による凱旋式の物語るところである。

確かなことといったらこの時代の市民にとって、もし「平和」の概念があったとすれば、それは先述のような「力の論理」、つまりは「平定」とか「支配」といった力ずくの、極端にいえば「戦争」がもたらす「平和」（秩序）のことではなかったか。もしも後代の歴史家ギボンが「人類史上もっとも幸福な時代」などと美化するあまり、「パクス・ロマーナ」（ローマによる平和）を、「戦争がない状態で世が平穏である」とか、「心安らかでやすらぐこと、おだやかで変りないこと」などと考えたとすれば、それは誤解というに等しいかもしれないのである。

Pax Americana（パクス・アメリカーナ）「アメリカによる平和」について

西欧（欧米）の歴史の中で「パクス・ロマーナ」と並んで「平和」が声高に語られるのは、現代の「パクス・アメリカーナ」

（アメリカによる平和）であろう。第一次世界大戦後やにわに超大国として世界の大舞台に躍り出た米国は、他国の追随をゆるさぬ国力にモノをいわせて「パクス･アメリカーナ」（アメリカによる平和）をくりだした。

確かに20世紀を迎えて第一次から第二次という世界大戦に終止符が打たれたとき、それぞれの戦いの戦後処理（講和）で見せたアメリカの世界史的な役割の大きさに世界は目を見張った。それはまさに「パクス・ロマーナ」の再来を想わせるに足るものであった。

しかし今翻って思うに、この「アメリカによる平和」（パクス・アメリカーナ）は、それが華々しく登場してきたわりには短命であったことを知る。米国は第二次世界大戦の戦後処理のおわりを見届ける間もあらばこそ、ソ連が領導する共産主義との戦いにのめり込んでいた。

朝鮮戦争を経て、あのむざまで無意味だったヴェトナム戦争に見切りをつけ（1970年代）、やがて悪夢の敵方ソ連邦が自壊作用（1991年）を起こして、いわゆる冷戦構造が止んでみると、もはや「パクス・アメリカーナ」を言いはやす者はいなくなっていた。

その理由は後述にゆずるとして、ここでは二千年という歴史的時間の経緯が、「パクス・ロマーナ」と「パクス・アメリカーナ」という今昔二つの概念にどんな相違をきたしたのか、わたしなりに簡単に触れておきたい。

たしかに現代の目から見ても、「アメリカによる平和」が「力の論理」に支えられたものであることは一目瞭然である。その点なら一見して「パクス・ロマーナ」とはなにも変わらないようにみえる。しかしそれは古代ローマにあっては実に「原初的」であった。

要すれば「強い者が勝ち，勝ったものが支配し、支配する者が平和（秩序）をもたらす」、つまりこれが「戦争（力）の論理」であり、同時にまた「平和の論理」でもあったのだ。

ところがそれに比べると、「パクス・アメリカーナ」（アメリカによる平和）の「力の論理」には、キリスト教的な原罪論がどっかと構える。言ってみればそれは人間本性と同様、国家もまた本来好戦的で侵略的であることをまぬがれず、所詮はそれ自体潜在的には暴力装置だと。

名だたる全米ライフル協会（NRA）の銘に は「Guns don’t kill people, but people kill people 」といった、うそぶくような文言が刻まれているお国柄である。そのアメリカが今もって自国内の銃規制すらままならぬ姿に、原罪の罪深さと宗教の限界を思わずにいられない。

米国の「力の論理」にはもう一つ、これを正当化する世界史的な思想が現れていたことを指摘しておかねばなるまい。それはダーウィンによる「進化論」である。このダーヴィニズム、すなわち適者生存・弱肉強食の科学は、米国のみならず19世紀の世界を席捲した帝国主義、とりわけ植民地主義の強力な理論的バックボーンだったことは言うまでもない。

以上はわたしから見た二つの「力の論理」の間の根源的な相違だが、現実的にもこの「力の論理」は、西洋が戦争の歴史と言っても過言ではない二千年という時代の経過のなかで、決定的な変質を来していたのであった。そのような変質を「パクス・アメリカーナ」（アメリカによる平和）のなかに検証してみると、わたしはここに二つの新たな歴史的現象を指摘できるのではないか思う。

その一つは第一次世界大戦の戦後処理（講和）で、時のアメリカ大統領ウィルソンが提唱した「勝利なき平和」、もう一つは「核」に代表される大量殺人･破壊兵器の出現による「Pax Nuclei」(核による平和)である。

「勝利なき平和」（The Peace without victory）について

この「平和」という言葉（the Peace）は

ウィルソン大統領が大戦の講和のあっせん者（mediator）として使用したものだから、正確には日本語なら「和平」か「講和」と訳すべきところであろう。とまれ彼はこのヴェルサイユ会議にのぞんで、自らが発表した史上有名な「平和14ケ条」構想を原則としながら、この講和の理念として説き来たったのが「勝利なき平和」であった。

戦争はたとえ勝利したとしても、勝者は敗者から領土も賠償金もこれを取り立てることは許されない、つまり勝利者の権利放棄ともいうべき講和（平和）条件のことである。これがウィルソンのいう「勝利なき平和」であり、具体的には「無併合・無賠償」を意味した。

これは多分に米国流の政治的理想主義宣言であったとしてもである。

しかしこのとき彼は、彼の唱えてきた「平和14ケ条」も「勝利なき平和」条件も、なんと第一次世界大戦を一緒に勝ち抜いてきた自陣営の連合国自体（英・仏・伊など日本を含む）によって最終的に拒絶されるという、思いも寄らぬ結果を招来することになる。そのウィルソン大統領が世界から「シルクハットを着たキリスト」と揶揄されながら、講和のアメリカの代表として孤独のうちにパリから帰国したものがたりは有名だ。彼が敬虔なキリスト教徒であったことは言うまでもない。

わたしが言わんとするのは今そのことではない。彼がその時は味方から拒否された「平和14ケ条」や「勝利なき平和」構想が、第二次世界大戦時の戦後処理では、ローズベルト大統領などによって「大西洋憲章」や「ポツダム宣言」の精神にひきつがれ、まがりなりに結実した歴史的な事実は今もわれわれ日本人の記憶に生々しいのである。それは国家による戦争が集団的殺人行為であるにもかかわらず、勝者が領土の割譲と賠償金を正当な「落とし前」として確保されるなどという、悪しき帝国主義的な戦争習慣の停止を意味したのであった。

「核による平和」（Pax Nuclei）について

米国の「パクス・アメリカーナ」が短命だったのは、一つには第二次世界大戦の終焉を境に、世界に冠たる米国の超大国としての台頭と思いきや、これまたあっという間に出現したソ連（共産主義）という、米国にとって悪魔のような超大敵を前にして、世界は文字通り二極構造化していったことだった。

しかし事実はといえばそれよりも重大な理由があった。それは米国が世界で初めて手にした、あの恐るべき大量殺人・破壊兵器「核」の拡散である。二極構造化した世界は、中国や第三世界の台頭、社会や経済のグローバル化などでさらに多極化してきたが、核兵器もまたそれにつれて米国からソ連そしてその他の国へと拡散していった。人類殲滅の危機と背中あわせの「核の均衡」というべき、「核による平和」（Pax Nuclei）の時代の現出である。

プロメテゥスは人類に「火」を伝えたとされる。爾来人間はその火をもって文明を灯してきたその一方で、自身の制御もきかない「核」という恐るべき自爆装置を作り上げてしまっていたのだ。人類はゼウスが予言し警告したように、その禁断の焔で焼き尽くされる危機に瀕している。それが「核による平和」の実体というものであろう。

「パクス・ジャポニカ」（Pax Japonica）について

「パクス・ジャポニカ」（日本による平和）なる言葉は、不遜ながらわたしの造語である。

こんな気取ったラテン語式の表記は先人に見習ったまでのものだが、「日本による平和」なら大いに喧伝これ努めたいとする者である。

第二次世界大戦の終焉からこの方およそ70年というもの、「平和」がまがりなりにも戦後世界に存在したとするならば(絶え間のない局地戦争の数々はともかく)、それはこれまで見てきたような「力の論理」に

基づく「パクス・アメリカーナ」（アメリカによる平和）であり、その変形としての「力の均衡」たる「Pax Nuclei」(核による平和)である。これまでわが国が享受してきた「平和」もまた、上述の二つの「パクス」の内だったことを免れない。

しかし今日誰がどのように言いくるめようとも、「核による平和」はもはや世界史的に「力の論理」が全く行き場を失ったことを意味している。そればかりではない、この論理の行き着いた先が崖っぷちであるのは、そこが人類殲滅の危機に瀕しているからである。こうした地球的存亡の崖っぷちに立たされ、あらためて世界史的な文脈（context）の中で「平和」を考えて見るとき、下記にわたしが示すような「Pax Japonica」（日本による平和）にも、今こそ国際場裡における活躍の必然性が認められるのではないか、というのが私の考えである。

ここにわたしがいう「パクス・ジャポニカ」(日本による平和)には、これを支えてきたものに三位一体ともいうべき三本の柱があったとわたしは考える。それは「非核三原則」、「戦争放棄」そして「日米安保体制」のことである。

「非核三原則」

就中その一つ「非核三原則」こそはヘーゲルの謂う「絶対精神」に似て、これまで日本の「平和」に果たしてきた役割には注目すべきものがあると思う。

ヘーゲルによれば人間の精神というものには、まず国民一人ひとりの心や魂、あるいは意識のありようとしての主観的精神がある、そしてそれは客観的な社会性を帯びるとき「法・道徳・人倫」となるが、さらにはこれら二つの精神が統一されるとき国民的な「絶対精神」が生まれるとした。

わたしはこの国の「非核三原則」はまさにこの哲学者がいうところのものではないかと考えている。それは情念でもなければ祈念でもない、かといって理念や理想といったものでもない。

しいて言うならば日本国民の……世界最初にして唯一の、かつて広島と長崎に投下された「核」の被爆国民としての…、それは地獄の阿鼻叫喚の昇華であり、畢竟するに止揚（アゥフヘーベン）というべきもののようにさえ思える。即ちそれが無意識のうちに日本人の「絶対精神」となっているのではないか。

「戦争放棄」

日本の「非武装化」がアメリカによる対日戦後処理の基本政策であり、大西洋憲章やポツダム宣言に基づく対日講和条件の核心であったこと、さらには極東軍事裁判が法的には1928年に締結された「不戦条約」に依拠していたことなどを思えば、敗戦時の日本が「非武装」とともに「戦争放棄」を、アメリカ占領軍によって押し付けられた（押しいただいた）としても不思議ではなかった。

ところが戦後まだまもない1947年トルーマン・ドクトリン宣言以降の、アメリカの変わり身の疾さに世界の目は見張ったものだ。つまり「自由と民主主義」にとって、第二次世界大戦のときは敵だった日本やドイツの「全体主義」が、今やソ連が領導する「共産主義」にとって代えられ、敵・味方が入れ替わると見るや、アメリカはやにわに国策の転換をはかった。

そうなるとアメリカは日本の「非武装」だの「戦争放棄」など打っ棄らんばかりに、なりふり構わず朝鮮戦争やヴェトナム戦争に挑みかかっていったものだ。「パクス・ジャポニカ」（日本による平和）にとっては苦渋のときであったが、「政治的理想主義」といわれ続けてきたアメリカが、理想主義をかなぐり捨てた瞬間といってもよかろうかと思える。

（以下　次号）

会員寄稿文

大 連 今 昔 物 語

安　武　国　章

私は大連に設立された日本・英国・中国の三カ国による金融合弁会社「北方租賃有限会社」への出向を命ぜられ、今から25年前の1991年２月赴任いたしました。季節は冬のど真ん中で大連空港（正式名称は大連周水子空港）の上空からの眺めは、緑の樹木が全然見えず、石炭の煙にかすんだ煤汚れた街並みが続く風景に、これは酷い所に来たものだと思ったのが第一印象でした。

しかし、合弁会社の90年度董事会（株主総会）が開催された会場は、海が眺望できる高台にあり風光明媚な「大連棒棰島賓館」で行われました。

ここは、かつて党幹部の夏の保養所として周恩来首相も利用された事があると聞かされ驚くと同時に、上空からの景色とは大きく異なる別世界でした。

董事会は、今夏ご逝去された丸山副社長のご出席を頂き前任者との引継ぎを兼ねて開催されました。通訳を介しての董事会は、とても緊張して臨んだ事を思い出しながら、大連の街の今昔を小説や資料を参考にして綴ったものです。

「東洋のパリ」を摸する

大連と日本との関わりは、今から122年前の1894年(明治27年)日清戦争に勝利し下関条約（日清講和条約）で遼東半島は、日本に割譲されました。しかし、ロシア・ドイツ・フランスの三国干渉によって半年の後、止む無く清国に返還されました。しかし、その後、ロシアは予てより極東における不凍港を求めていたので清国に対し遼東半島を取り戻した報酬として1898年旅順と大連湾を含む関東州の租借を求め手に入れる事ができました。当時のロシア皇帝、ニコライ二世は、この辺ぴな港町を極東の一大商港として開発して、併せて「東洋のパリ」と言われる街造りを夢に描いて建設がはじめられました。その任務を帯びたのがロシアの国策会社である「東清鉄道会社」で、彼らは満州里（現在の内蒙古自治区）から哈爾濱（ハルピン）を経て大連・旅順と続く大規模な鉄道網の敷設に着手したのです。そして新しい都市「ダルニー」が誕生しました。「ダルニー」とは、ロシア語の「遠隔」と言う意味と聞いていますが、当時の首都ペテルブルグから見れば大連は、まさに遠隔の地であったわけです。ダルニーの都市建設と並行して、競うかのような格好でロシア海軍と陸軍は「旅順」に強大な軍港と要塞の建設が進められておりました。

（写真１）203高地に建つ忠霊塔
砲弾型の碑に「爾霊山」と刻まれている

これが日本にとっては大きな脅威となってきました。その結果、強力なロシア軍の極東進出を恐れた日本は、ロシアと対立するところとなり、1904年（明治37年）日露戦争が勃発しました。

旅順要塞の攻防では、多くの戦死傷者を出しながらやっと陥落させた陣地

あと（203高地）には現在、砲弾型をした大きな忠霊塔が建立されており碑に「爾霊山」（に・れい・さん）と刻まれております。(写真１)

そして、ロシア軍の司令部が有った所には、旅順湾に向かって設置されていた巨大な大砲が戦跡として当時のままの状態で残っておりました。現在は撤去されているかもしれません。(写真２)又、東郷平八郎元帥率いる日本連合艦隊とバルチック艦隊との日本海における海戦では圧倒的な勝利を得た話などは、司馬遼太郎氏の小説「坂の上の雲」で詳しく述べておられます。連合艦隊の旗艦として活躍した戦艦「三笠」は現在、横須賀の三笠記念公園に「記念艦」として保存され一般公開されております。

ご参考ながら日露戦争勃発時、連合艦隊の参謀長をされた島村速雄氏（後の海軍大将）は、元ニチメン東京財務部部長をされた島村健雄氏の祖父と伺っております。日露戦争終了後、日本はロシアが租借していた遼東半島を引き継ぎロシアと同様に国策の「南満州鉄道株式会社」(略称：満鉄)を設立し、ダルニーを「大連」と改称して、自ら植民地経営に乗り出しました。

因みに満鉄の初代総裁は、後藤新平氏であります。

1905年の統治から1945年の太平洋戦争終結までの40年間、日本はロシアが残した素晴らしい都市計画の青写真をほとんどそのまま引き継ぎ建設が進められました。この都市計画は、帝政ロシアの建築技師サハロフがパリをモデルに設計した西欧風のもので従来、日本には無かったもので言わば日本近代化のモデルケースと言えるものでした。

そして、多くの日本企業がこの地に進出し、1944年７月(終戦１年前)には、日本人が約20万人も生活しており、大連市全人口80万人の実に25％を占めるまでに発展しました。現在の大連市区の人口は約220万人と言われており約３倍に増加しております。

「アカシアの大連」という私小説で芥川賞を受賞された、清岡卓行氏の作品に「初冬の大連」と言うのがありますが文学性豊かに、かつ正確に大連の街の

今昔が描写されておりますので興味のある方は、一度読まれることをお勧めします。ロシアから持ち込まれたアカシアの樹は、街路樹としていたる所に植樹されており白い花を付ける五月頃は、本当にきれいです。しかし、樹木の老化と手入れの不備から倒木が進んでおります。また、大連郊外にはリンゴ畑が多く見られ、こちらも白い花が咲く頃は素晴らしいです。

「北方の香港」を目指して

大連は、東経121度、北緯39度（秋田・岩手県と同じ緯度）の遼東半島の南端に位置する沿海都市で東は黄海、西は渤海湾に臨み、北は遼寧省の瀋陽（旧名：奉天）、吉林省の長春（旧名：新京）、黒竜江省の哈爾濱と繋がっており中国では、これらを一括して東北三省と呼んでおります。（写真２）

（写真２）東北三省（遼寧省･吉林省･黒竜江省）
朝鮮半島・日本の位置を示す地図

日本は、清朝のラストエンペラー愛新覚羅溥儀を皇帝に仕立てて、傀儡国家「満州国」を作ったのもこの東北三省でした。戦後1960年代後半、中国とソ連との関係が緊張状態になり、ソ連の南下を恐れた中国政府は、東北三省から多くの施設や産業が遠ざけられました。また、戦争に備えて地下壕が掘られたりして新しい投資や開発が行われなかった為、東北三省の発展は非常に遅れてしまいました。

大連駅は、この東北三省の人の玄関口として、ちょうど日本の上野駅に相当するところから駅舎は、上野駅を真似して造られており、今日でも東北三省への鉄道の発着駅として健在で大勢の乗降客でにぎわっています。当時、蒸気機関車ではアジアで最高速度120キロを出した特急「あじあ号」がここ大連を始発駅として哈爾濱までの間を12時間半で走っていましたので多くの諸先輩もご利用されたことでしょう。(写真3)

（写真３）当時、アジアで最高速度を記録した蒸気機関車（あじあ号）

現在は、大連高速鉄道（日本の新幹線と同じ）により大連―哈爾濱間約950ｋｍを最高速度、時速350ｋｍで運転され所要時間は約３時間半とのことです。この区間の建設工事のスピードが極めて速いのには驚かされますが中国全土で繰り広げられている高速鉄道網展開の速さは、今日の中国の発展を象徴するものの一つでしょう。

一方、大連港は、広州・上海・天津の四大貿易港の一つとなり東北三省の海の玄関口としてとして活躍してます。赴任当時「北方の香港」をスローガンに薄熙来市長（後に失脚）がリーダーシップを発揮して郊外に日本からの投資を得て大規模な経済技術開発工業団地の建設と多くの日系企業の誘致が進められ大きく変貌を遂げました。造船業も発展して、今日では大型の船舶が建造されており、特記すべき最近の事柄では、ソ連が資金難から建造を中止し廃棄寸前であった空母をスクラップとして買い取り大連造船所にて改修して中国初の空母「遼寧」として就航させたことです。

大連は、歴史的な大きな波にもまれながら社会主義市場経済の体制の下、大きく発展し変貌を遂げてきました。1950年、旅順市と大連市が併合され一時期「旅大市」と呼ばれた時がありましたが1981年、再び大連市と改称され、そして大きな権限を有する遼寧省の副省都市の指定を受け大都市に

（写真４）元日本綿花大連支店（創立100周年誌より）外観（屋根が尖っている）

（写真５）元日本綿花大連支店の現状
（屋根の尖りが無い）

なってゆきました。因みに、遼寧省の省都は瀋陽（昔の奉天）です。

かつて、日本人が「山県通り」（山県有朋）と呼んでいた通りは、戦後「斯大林路」（スターリン通り）と代わり、更にソ連崩壊後、現在は「人民路」と再び改名され歴史の流れを感じます。

ニチメンの前身、日本綿花（株）は、1913年（明治44年）出張所を開設し、1919年（大正７年）支店に昇格しました。多くの古い建物が姿を消して行く中、旧支店ビルは、尖がった屋根は無くなり平らなものになってしまいましたが人民路と安楽街の角に２階建てのまま健在です。しかし、周りの景色は、すっかり変貌して、かつての面影は失せております。(写真４・５)

余談ながら小生の郷里、山口県下関市にある赤間神宮の北東側に大連神社が祀られていることは、余り世間に知られておりません。大連神社は1907年（明治40年）大連で創建され日本人の精神的なよりどころとして存在していましたが終戦により内地への引き上げの際、宮司がご神体とご神宝を背負って帰国され、福岡の筥崎神宮に仮安置されておりました。昭和28年、赤間神宮の宮司として赴任されるにあたり、ご神体をここに遷され祀られて現在に至っております。因みに、赤間神宮は、壇ノ浦の戦いで亡くなられた安徳天皇と戦いに敗れた平家の武将達が祀られており毎年５月「先帝祭」として市を挙げてのイベントが開催されております。また小泉八雲の怪談「耳なし芳一」の舞台となったところでもあります。旧大連神社の敷地内には、現在、大連外国語学院があり中国語を勉強する日本からの留学生が大勢学んでおります。

東洋のパリを模して街づくりが進められた大連は、新しい近代的な高層ビルへの建て替えが進んでおり、「アカシアの大連」に描写されたヨーロッパ風の瀟洒なこの街並みの情景も残念なことですが時の流れには勝てず、香港の様な近代的な高層ビルが聳え立つ都市に変身しつつあり近未来、昔の姿は消えてゆく運命にあります。（写真６）

（写真６）新しい高層ビルが聳え立つ現在の
「中山広場」正面奥に見えるのは旧横浜正金銀行
大連支店。現在は中国銀行大連支店

現在でも使用されている主な建物は、下記のものが存在しております。

＊大広場（中山広場）
＊日本橋（勝利橋）
＊大連市庁舎(中国商工銀行)
＊大和ホテル（大連賓館）
＊満鉄本社（瀋陽鉄路本社）
＊満鉄病院（大連大学付属医院）
＊大連日赤病院（大連医科大学第一医院）
＊横浜正金銀行大連支店(中国銀行大連支店)

出典資料：写真集「大連旅游」＆横須賀観光案内
ニチメン創立100周年社史

会員寄稿文

ミャンマー再訪記(続)

丸　野　　純

日緬合弁の野菜冷凍工場立ち上げの為、昨年８月10日に日本を離れ、ベトナムで３週間程研修した後、ミャンマーに入りました。

今年７月14日に何とか開業式典を終え、９月初めに日本に帰国しました。

結局、ミャンマーには、１年程駐在しました。

駐在の経緯などについては、「会報No.19(2015年12月15日)」に“ミャンマー再訪記”として書かせてもらいました。

今回は、その続編です。

＜国家顧問兼外相アウンサンスーチー＞

今年11月初め、アウンサンスーチーミャンマー国家顧問兼外相が来日し、安倍首相と会談。8,000億円の支援の約束を取り付けました。(ミャンマーには苗字はないので、“アウンサン・スー・チー”と区切るのは誤りだそうです)彼女が党首のNLD(国民民主連盟)が総裁選挙に勝った時、彼女が「私は大統領より偉い！

全て私が決める！」と言っていたので、天皇親政を目指して建武の中興をやった後醍醐天皇みたいにならなければいいなと思っていたのですが、予想以上に柔軟でしたたかなようです。

新政権は、旧政府の大臣ら(ほとんどが元各軍管区の軍司令官ら軍幹部)を汚職で逮捕しようとするかもしれないと思っていたら、今のところ誰も捕まっていません。

勿論、新政権がそんな事をし始めたら、あっと言う間に軍に鎮圧(クーデターと言うのかもしれません)されてしまいますが。

彼女が日本に来れば8,000億円！ですからね。この“金看板”は大事にしなければなりませんね。彼女も既に70歳。子供達(息子二人)は英国人とのハーフで、英国育ち。

「ミャンマーなんかに住みたくない」と言っているようですから、彼女の後を嗣ぐことはありません。支配層の連中は「精々今の内に外国からお金貰ってきてね」と思っているでしょう。

＜MAF開業式典＞

本年７月14日にMAF(Myanmar Agri Foods Co., Ltd.)の開業式を執り行いました。

上は開業式典の写真です。

日本からは投資家、業界紙等20数名、現地からは新農業大臣、役人、農民代表等２百人程が参加しました。

(“ミャンマー”、“冷凍野菜”等のワードでネット検索すると一応、記事が出ます。)

実は、MAFは前農業大臣(前職はシャン軍管区司令官)の全面的な支援を受けてできた会社なので、政権交代で相当まずい状況になることが懸念されました。“農民の生活向上の為の工場”との大義名分もあり、“蛇の道はヘビ”と言うことで色々伝手を辿り、何とか新農業大臣に出席して貰い、スピーチを頂き、事無きを得ました。新大臣がスピーチをしたと言う事は、新政権の“お墨付き”を貰ったと言う事ですから。

農業省の組織もどうなるか心配しましたが、新農業大臣には大学の元教授、副大臣には農業省のOBを据え、実務は副大臣が仕切り、官僚機構はそのままと言うことで、実態的には殆ど何も変わりませんでした。一安心です。

開業式典へのスーチーさんの出席も様々なルートを通じて画策してみましたが、何と各国の大臣、議員、大使、国際機関の幹部などの面会要請が数百件も来ている由で、流石に一民間企業の開業式典では無理でした。ただ、彼女のスケジュールは国のトップシークレット（暗殺を防ぐ為）で、「来ない」との連絡もなく、前日ぐらいまでは、「もしかしたら、当日来るかもしれない。その時は、全てを彼女の都合に合わせる」と言うことだったので、緊張はしました。もっとも、農業大臣も式典の1日半前に、午前中に来る予定が午後に変更との通告があり、参加者への連絡、段取り変更等大いに慌てました。

私が滞在した1年間は、昨年11月の総選挙（スーチー女史の率いるNLDが圧勝）と、それに伴う政権移行（本年4月）が行われた“激動の一年”であったらしく、日本の友人からは「丸野さん、正に歴史が作られる現場に立ち会っているんですね！」などといたく興奮したメールを貰いました。しかし、当方は首都のネピドーに居たにもかかわらず、選挙でもデモや暴動があった訳でもなく（多少の混乱はありましたが）、また政権移行も裏では様々な駆け引きがあったようですが、少なくとも表面上は“淡々”と行われ、正直な話、「これが歴史作られている現場なの？」と不思議な感じでした。現場にいるとそんなものかもしれませんね。

＜“旧ニチメン・ヤンゴン支店”＞

下は、旧ニチメン・ヤンゴン支店の現在の写真です。

ヤンゴン市内ダウンタウンのど真ん中にあり、ヤンゴンの“丸の内”に小さいながらも一戸建てのビルを借り切っていた訳です。いつからここに店を構えていたのか知りませんが、多分、相当古い時代からだったと思います。この建屋を覚えておられる諸先輩もいらっしゃるのではないでしょうか。

1992年4月、着任早々、オーナーから「ホテルにするので、即刻立ち退いて欲しい。前任者には以前から要求している」、スタッフからも「駐車場が一切なく、ダウンタウンの渋滞も酷く、どうにもならない」との話があり、半年程後に引っ越しました。

この建物は、現在書店となっており、外観は勿論、階段等内部構造も殆ど変わっていませんでした。

新事務所は、駐車場のことも考えて、ヤンゴン駅裏近くの庭付き一戸建て平屋にしましたが、現在その場所にはビルが立ち並び残念ながら昔の面影は全くありませんでした。

＜ヤンゴン・ゴルフ・クラブのニチメン専属キャディー＞

下は、ヤンゴン・ゴルフ・クラブ（1909年創立の名門）で昔のニチメン専属キャディーと撮った写真です。

たまたまヤンゴンに出張した際に休みがあったので、ニチメンの旧スタッフを伴ってヤンゴン・ゴルフ・クラブに行ってみました。20年も前の事（1992年4月～1995年4月にヤンゴンに駐在）ですから、まさか、当時のキャディーが見つかるとも思えなかったのですが、一応、旧スタッフに捜しに行かせたところ、「元ニチメンのキャディーを知っている！今、家に呼びに行っ

て来る」と言う。キャディーが現れ、無事、元ニチメンのキャディーと会う事ができました。当時、キャディー達はゴルフ場のすぐ脇の村に住んでおり、各家族が夫々の商社、大使館等の専属（勿論、契約がある訳ではありませんが）として生活していました。

写真に写っているのは、ニチメン専属一家の家長のオヤジさんです。お客さんと行った時には、長男、長男の嫁、長女、次男など一家総出で、キャディーやフォアキャディーを務めてくれました。当時は各社とも駐在員や訪緬するお客の数も減っており、キャディー達の生活はどんどん苦しくなっていたようです。

オヤジさんに話を聞いたところ、長男は亡くなって、長男の嫁は食べることができないので、マレーシアに出稼ぎに行っているとのことでした。結局、この一家が双日のキャディーとして引き継がれることはなかったのですね。

尚、ミャンマーでは、それなりにゴルフが盛んで、今年２月には、「レオパレス21ミャンマーオープン2016」が開催され、日本からは池田勇太、藤田寛之をはじめ40人以上の日本人トッププロが参加しました。残念ながら優勝者は、南アのS..ノリスでした。

＜正真正銘の“道路兼滑走路”＞

上の写真は、新首都ネピドー近くの国道一号線に直行している道路です。車やバイクが走っていますから、間違いなく一般道路です。私も走りました。ただ、この道は数千メートル先で、突然道幅が数メートルのローカル道路になっています。

正真正銘の“道路兼滑走路”と言うか“滑走路兼道路”です。

ミャンマーには大きく８部族、全体で135に及ぶ民族が存在し、未だにカチン独立軍など少数民族の反政府軍事組織もあり、国軍と実際に戦っています。現在でも国軍は少数民族との戦闘で戦死者を出しており、バリバリ現役の軍隊なのです。

滑走路兼道路も仕方がないかもしれませんね。　（終り）

前列左より：広本昌也、長谷川洋、岡田茂、漆崎隆司
後列左より：丸野純、藤井宏憲、樋口龍彦、大平栗雄、南部捷郎
2016. 10. 20（丸野帰朝記念Mini-MSD会）

会員寄稿文

もっとも安上がりな自費出版

芳　賀　信　明

人生70年を過ぎたころから誰しも自分の一生を記録に残して子孫に伝えたいと思う気持ちが強くなるようです。そんな方々のために私の経験をお話しして、なにかの参考になればと思って書いてみます。

2009年４月のある土曜日、翌日の大学クラス会のゴルフコンペの支度をしているときに、ゴルフの小物が足りないことに気が付きました。当時、私はゴルフ用品を上野のアメ横のゴルフ専門店で買っておりましたので、急遽出かける支度をするべく家の中を動き回っている最中に階段の踊り場を飛び越し損ねてうつ伏せに転んでしまいました。立ち上がろうとしたが足に力が入りません。アキレス腱を断裂したのでした。それから長い療養生活に入りましたが、なんとかベッドと机の間を往復する以外の動きは制限されており外出などは思いもよりません。そこで一度ブログというものを書いてみようかという気分になりました。

当時はFacebookやtwitterなどは、なかったと思います。

なにを書こうかと思いましたが当時私は74歳、私の家族に知られざる会社生活を赤裸々に書いて遺言代わりに家族に残そうと思いました。

もちろん、ブログは一般公開を目的としたものですから会社名や登場人物は全部仮名とし、私自身も適当なハンドルネームを作りました。

スタートは入社時の思いでで、月給9800円で勇んで出社したものの５時になっても６時になっても９時になっても先輩たちはひたすら仕事に専念していて飯を食いに行く人さえおりません。ある日９時ころに仕事を終わって、直属の上司、一年先輩の加藤二男さんに連れられて帰り道にあるトリスバーに行きました。酒に弱いうえにすきっ腹にアルコールを流し込んでいるうちに目の前が真っ暗になってきました。失礼してやっとの思いでトイレに辿りつきドアを閉めた途端に倒れて気を失ってしましました。ほんの一瞬後にいい気持ちで目を覚ましましたが苦い思い出です。

そんなことを書き始めて、金属部受渡課時代、鉄鋼国内営業時代、マニラ駐在員時代と書き進めてきました。このころになると、なんの色気もない文章だけの私のブログにも固定ファンがついてくれて、時々書き込みで励ましてくれます。３年のマニラ駐在から帰国したのが1966年、そこで急遽見合い結婚して1972年にヒューストン駐在員を命じられました。

1978年まで家族帯同で駐在、娘も現地で生まれました。1982年に６年半の駐在期間一度も帰国せずに務めました。

ここまでブログを書き進んできたときに、ブログの片隅に「あなたのブログを本にしませんか」とうバナー広告が出ているのに気が付きました。しばらくは放置していたのです、好奇心から、このバナーをクリックするとブログ本文が本になったイメージが出てきました。この時点で自分なりに校正ができますが、私はすでに数百ページを書いていましたし本にするにしても遺書代わりのつもりですから家族以外に読む人がいません。校正までして気を使うこともないので放置することにしました。フォントも選べますが私は無難に標準のものにしました。

文章に間違いがなければ、今度は表紙選

びです。表紙は色やパターンのサンプルが沢山用意されていて、そこから自分で選ぶことができます。表紙はソフトカバーかハードカバーかを選びます。ハードカバーの表紙にはさらに同じ図柄のカバーをかけることもできます。私は一番安いソフトカバーを選びました。

入社からヒューストン時代まで合計約400ページになりました。本のサイズはB6です。

本文は白黒かカラーによって値段が違いますがサイト上で見積もってもらうと、以上の仕様にて白黒で5000円弱となります。

はたしてこのサイトが信用できるのかどうかも疑心暗鬼でしたが、意を決し申し込んでみることにしました。代金はクレディットカード決済にしました。最後のボタンをクリックしてから本が届くまでの一週間は心配でした。

私はなにかシャビーな本が届くのではないと思っていたのですが、届いてみると予想以上の出来栄えでした。奥付には発行日や著者名（私の本名）もちゃんと入っています。

スマホ用のQRコードも入っていて、ここから私のブログを呼び出すこともできます。

私は満足でした。

これに勇気づけられて第二巻はヒューストンから帰国して鉄鋼貿易配属、三年後のヒューストンの合弁会社派遣、さらに帰国後鉄鋼総務部からニチメン鉄鋼販売派遣の発令まで、第三巻はニチメン鉄鋼販売勤務から関連事業部を経て退職、さらに退職後の第二の人生のことも書きました。

これで私の仕事時代のことはすべてカバーされました。私としては家庭生活以外に職業人としてこんな生活を送っていたのだということを家族に知ってもらえれば満足です。

ただし蛇足として少年時代のものを加えて全四巻としました。このころになると、私も大分ブログに慣れてきて、自分でとった写真やネット上の画像や映像をブログに組み入れることができるようになりました。ただし、言うまでもありませんが動画は印刷できません。

その後、クラス会で数百万円だして自費出版している人がいたので、私の話をしますと「ぜひ、一部譲ってもらいたい。」との申し出がありましたが、一部しか印刷していないので残念ながらお断りしました。

私もこのブログを読み返してみると、これは書かなかった方が良かったんじゃないかという点が数か所あって、改訂版を出そうと思いましたが、なんと「あなたのブログを本にしませんか。」というバナー広告が見当たらなくなっていました。サーバーに問い合わせると、その業者とは契約を打ち切ったとのことです。 この業者に問い合わせると、同じサービスを提供している他のブログがいろいろあるので、ブログをそちらへ引っ越してもらえれば改定可能との返事でした。面倒ですからそこまでやる気はありません。

なお、ブログは設定によって「公開」「非公開」「友人のみ公開」など、色々選べますから非公開にすれば本名で書いて日記代わりにすることもできます。

というわけで、私の自費出版４冊はオリジナルのまま私の引き出し奥深く眠っております。妻には私が死んだら読んでくれるように言い渡してあります。

（終）

第11回機友会

星　加　　恭

2016年10月15日（土）市ヶ谷のアルカディア私学会館にて第11回ニチメン機友会を開催しました。

猛暑、台風と気候不順等で開催日の天候が危惧されましたが、今回の会を祝福するが如く快晴に恵まれ、参加者の当日キャンセルも少なく、飛び入りの方もおられ総勢51名の参加者となり、11時15分予定通り開場し、開宴前に恒例となっている写真撮影を３グループに分け全員の撮影を無事終了し、今回幹事担当の建機車両部OBの三原さんの司会にて定刻通り12時に開宴致しました。

毎回お世話になっているニチメンマンドリンクラブのニチメン社歌のBGMが流れる中、三原さんよりの開会宣言後、この１年間で残念ながら逝去された６名の物故者の氏名が披露されました。（丸山修作、森本倶行、新崎盛晨、平床幸次、永井存、浜島儀則）

しばし歓談後、水庫会長が挨拶され水庫会長の若き時代のエピソードが披露され、そのひとつとしてニチメンがWASH AIR SHEET（現在では各家庭に普及されているウォッシュレット）のライセンスを取得し販売を担っており、当時は非常に高価なもので裕福層や有名女優等に納入したものの漏電事故のクレームを受け、水庫さんが漏電であればゴムサンダルを履けば問題無いと説明し、顰蹙を買いたいそう叱られたお話をなされ盛り上がりました。（小生新入社員時代受渡課でアメリカ向けにWASH AIR SHEETのデリバリーを担当しこのような歴史に触れ懐かしく大変感激しました、参加者の皆さんも当時のニチメンの先見性に驚かれていたようです。）

引き続き、今回出席の建機車輌部OBの中で最長老である細井さんより乾杯のご発声があり、ニチメン建機車輌部の過去の欧州との取り組み、共産圏商いでの強さ、アジア進出、車輌輸出、また各メーカーとの取り組み等歴史が披露されました。現在の双日では建機部門が無く一抹の寂しさを感じた次第です。

次に、物故者への黙祷が行われ、今回大阪から駆けつけてこられた吉本さんより機友会で名誉会長を務められOBの重鎮であられた丸山副社長の海軍兵学校出身等の経歴および人柄が種々披露され、参加者全員で物故者を偲びました。引き続き今回の幹事部代表である小生より今回の幹事諸氏の紹介後、ニチメン建機出身で双日にて産業機械・軸受部で部長として活躍されている辰巳さんより現在の双日の状況および業務説明があり、ニチメンで培った伝統とDNAを守り後輩として頑張っている、また守って行くつもり旨の力強い発言がありOB全員が心強く感じた次第です。

宴は徐々に盛り上がり、ニチメンマンドリンクラブの華麗なる演奏を楽しみながら歓談後恒例となっている「青春時代」を全員で合唱し、往年の若き時代を思い出し全員で声を張り上げ、その後自称ニチメンマンドリンクラブ専属歌手？の石川信行さんのライブショウを楽しみました。

あっという間に時間が経ち、名残尽きない会ではありましたが建機OBの山路さんが中締めの挨拶をされ、関東一本締めでお開きとなりました。

今回の機友会開催にあたり毎回お世話になっているニチメンマンドリンクラブ（与儀ちゃんバンド）の方々に心より御礼申し上げます。

最後になりますが受付を担って頂いた久佐賀さん、岡田さんご姉妹はじめ機友会世話人の久本さん、豊間根さん、および幹事の方々の御協力有難うございました。

次回機友会の幹事はプラント本部となり開催予定は2017年10月14日（土）の予定です。

来年またお会いしましょう。

前列左から（敬称略）：
川西勲、廣田益一、岡村宏、吉本那晴、
水庫博夫、倉又則夫、林正弘、
高橋要司、山岸正雄
後列左から（敬称略）：
近藤昭弘、久本紘一、三上彰久、
江崎一、山邑陽一、山路次郎、松本等
〔枠外〕：古家章

前列左から（敬称略）：
保科孝、稲治寿、細井康男、佐藤統次、
佐藤鐵雄、川西啓三、五月女穣、
池永宏、辰井健
後列左から（敬称略）：
大羽陽一郎、北川幸雄、泉伸夫、
高田勝彦、石川信行、伊藤祐郎、
石川明、鈴木淳一

前列左から（敬称略）：
豊間根政行、岡田祐美、岡田真弓、
久佐賀文月、朝倉重道、星加恭、
数森正彦、南部捷郎、湯浅荘三郎
後列左から（敬称略）：
三原均、辰巳賢一、並木正、河原均、
木皿重正、今村隆夫、中原正紀、
安武国章、山崎晋

第11回機友会　2016年10月15日　土曜日　於：アルカディア市ヶ谷（私学会館）伊吹の間

出 席 者 名 簿

（あいう順・敬称略）当番幹事：建機車輛部

1	朝倉重道	21	佐藤鐵雄	41	松本等
2	池永浩	22	佐藤統次	42	三上彰久
3	石川信行	23	鈴木淳一	43	水庫博夫
4	石川明	24	高田勝彦	44	三原均
5	泉伸夫	25	高橋要司	45	安武国章
6	伊藤祐郎	26	辰井健	46	山岸正雄
7	稲治寿	27	辰巳賢一	47	山崎晋
8	今村隆夫	28	殿岡敬久	48	山路次郎
9	江崎一	29	豊間根政行	49	山邑陽一
10	大羽陽一郎	30	中原正紀	50	湯浅荘三郎
11	岡村宏	31	並木正	51	吉本邦晴
12	数森正彦	32	南部捷郎		
13	川西勲	33	林正弘	受付	久佐賀(嶋)文月
14	川西啓三	34	久本紘一	受付	岡田祐美
15	河原均	35	廣田益一	受付	岡田真弓
16	木皿重正	36	古家章		
17	北川幸雄	37	星加恭	NMC	＜ﾆﾁﾒﾝﾏﾝﾄﾞﾘﾝｸﾗﾌﾞ OB・OG＞ 林光生
18	倉又則夫	38	保科孝	NMC	福西育郎 入江隆史
19	近藤昭弘	39	細井康男	NMC	与儀(高橋)キハ子 榎本(高橋)万起
20	五月女穣	40	丸野純	NMC	梁瀬(石井)桂子 舎川(南雲)恭子

俳句の会「いろは句会」

塚　本　幸　雄

「いろは句会」は平成28年10月には創設以来28年経ち第324回を迎えることになりました以下に本年５月から10月までの例会に提出された俳句の中から皆さん自選の俳句をご披露致します。

若竹の節目節目を伸び行ける　宇治田　薫　風
ポケモンGO世界を制す炎暑かな
会釈して交はす言の葉深む秋

一村の正午の時報さみだるる　久保田　悦　子
十薬の花一色や軒の下
硝子戸に不動のままの守宮かな

武者人形いざ出陣と太刀構へ　佐　藤　英　二
梅雨空に昭和の二人旅立ちぬ
法師蝉宿題せよと鳴きはじめ

気の重き心の狭間さみだるる　下　川　泰　子
蓮の葉に雨の滴りころがれり
風吹かばそよぐ木々の葉秋の色

さみだれの昏き参道無季の句碑　塚　本　光　生
鐘楼を一巡りせし夏の蝶
しなやかに風選り分かつ糸柳

黴の香や重き扉の宝物殿　藤　野　徳　子
留守居せし証の如くちちろ鳴く
届く荷を解けばふるさと秋出水

雨降れば暮るる早さよ九月尽　若　月　義　和
マチネ―寄席藍色柄の浴衣がけ
夜の影におじけ恐るる尾花かな

第29回ニチメン如月会（経理部懇親会）開催報告

浅　利　真　司

6月18日（土）青学会館アイビーホール（渋谷区表参道）において恒例の如月会が催された。
1988年にスタートしたこの経理部親睦会も会を重ねてあっという間に29回を数えている。毎回20名の皆様を集めることに四苦八苦していたが、一昨年暮れの「ニチメン東京社友会 会報」への投稿が功を奏したのか、今年は23名の参加を得ることができホットした。今回はOGの皆様の参加はなく残念だが、山口県から勝井嗣雄さん、財務部より新藤孝さん（経理部の皆様大変お世話になりました。）の参加もあって楽しく過ごすことができた。

12:00まず最初に4月に逝去された水田眞琴さん（66歳）に対する黙祷に始まり、続いて全体撮影 ⇒ 今回出席者の最長老である三分一克美さんによる開会の挨拶で会がスタート ⇒ 乾杯 ⇒ 歓談 ⇒ 出席者近況報告 ⇒ 歓談 ⇒ 欠席者からのお便り紹介 ⇒ 歓談 ⇒ 幹事より事務連絡等を経て、世話人代表の名島憲一郎さんの閉会の辞を頂く、あっという間に中締めの時間となり、いつもの通り、金井湧二さんの発声で一本締めとなった。
途中, ワイワイ・ガヤガヤ, ああでもない・こうでもない、三々五々談笑の輪が起こって、お互いに旧交を温め合う楽しいひと時を過ごすことが出来、来年の再会を約束して会は14:00無事終了した。

さて、来年2017年は、30回目の節目の年。下記スケジュールの通り、同じ季節、同じ会場で、開催する予定です。ニチメン経理本部に係る老若男女の皆さま、恙なく1年を過ごして頂き、また来年も元気でお会いいたしましょう！！

第30回如月会開催スケジュール

日時：2017年6月17日（土）
　　12：00～14:00 (開場11:30)
場所：IVY　HALL 2F 「アロン」
　　住所：東京都渋谷区渋谷4－4－25
　　電話：03－3409－8181

第29回　如月会参加者（敬称略）

向かって左下段
永田堅志郎、金井湧二、内海和男、名島憲一郎、三分一克美、矢口三郎、山本裕昌、三浦甲蔵、村澤醇治
向かって左上段
太田弘之、勝井嗣雄、谷祥四郎、浅利眞司、新藤孝、田中聡太郎、桝潟磐夫、岡田洋輔、星野則和、大羽陽一郎、福井芳樹、小竹浩之、細井衛

丸山修作さんへの弔辞

辻　井　準　一

今年の８月31日、私は万感の思いを心に、懐かしいシカゴ、オヘア空港に着いた。

30年ぶりの再訪である。丸山さんと深い御縁の出来た土地、久しぶりに観るシカゴは、陽光高く、快晴で、思ひの外に涼しく快適で、当時と比べ驚くばかり大規模化され、コンピュータ化された大空港の姿に、田舎者の頓馬な姿は、おかしな図であったであろう。遺憾なく、その大都会の美と偉容を発揮した様変わりに驚いた。そして、こゝで、この良き男、丸山さんとの出会ひの運命が始まったのだとの実感を新たにした。併し、もうその人は居ない。街に入り、益々その実感を深め、丸山さんを偲びました。

久しぶりに観る米国第二の産業都市シカゴを前に、ついこの２ヶ月前、July 11、惜しくも、この世を去った丸山さんの最も思い出深い街に、今私は立っているのです。

シカゴと言えば丸山さん、丸山さんと言えばシカゴ、そのシカゴに、ニチメンの米国で、第二の拠点を築いた、その雄姿を今追っているのです。

丸山さんを偲ぶ時、今も心に深く残るものは、その“江戸っ子”ぶりである。東京、江戸は浅草に生まれ、下町ベランメエ―の人物、侠気が自然と湧いて出る様な人物、そんな言葉が、その背中に感じられる人、New YorkからChicagoを設立した土橋さんの後を継ぎ、手堅い第二の拠点に育てた人、米国と言う大市場に、ニチメンにとり二番目の商域を開拓し育てた人は、丸山さんです。

翻って、この私は、京都生まれの京都育ち、歴史は古いが、真底保守の塊の私と異なり、誠実で堅実、曲った事の嫌ひな性格は、その風貌に現われ、常に正義を説いた。そして、この広い米国中西部の市場にゆるぎない商権を確立、信用ある地盤を築いた。江戸っ子の面目躍如たるものあり、反対に私は、保守とは異なり、冒険好きで、７割よしと見たら、もう走り出す様な浅学菲才の輩、結果、本社の意に反し、堅実、保守の精神を無視した厄介な行動派で、大きな不注意なリスクを取り、会社に大損を及ぼし、折角丸山さんの築いた城を壊し、悄然とChicagoを去った。

人の運命は様々、丸山さんは去り、私は生き残り、丸山さんは栄光の出世の道を昇り、華やかな人生を享受し、私は何の成果も残さず、ニチメンを去った。併しその時、丸山さんの私に示してくれた江戸っ子の人情と言うか、温かく、真情のある好意と友情は、今も深く心に残り、私が今も心に敬愛する山本五十六長官は、丸山さんの様な人物ではなかったかと思う位であります。

丸山さん、私も間もなく貴方の許に行くでせう。そして泉土の地で再会を喜ぶことでせう。

そしてあの懐かしい男前の悠然とした笑顔で迎えてくれることと思ひます。

何もかも、懐かしく、心に残る人、今一度あなたの悠然とした一生の昔を振り返り、改めて、深く哀悼の意を表します。合掌。

前会長島崎さんを偲んで

石　原　啓　資

昨年４月上旬、突然島崎さんからお電話をいただきました。

島崎さんとの出会いと云っても、年齢差20歳もあり雲の上の方で、昭和50年日綿実業（株）に入社した折に日本橋ビルの三階で農薬部長としての威厳を示され「部長様って偉大だなあ」と心の中で思っていた方で、直接会話をさせていただいたのはそれから20年以上後のことでした。

お電話の内容は「ニチメン東京社友会の会長職を引き受けてくれ」とのこと、私の名前が出る前に、候補者は数多くいらっしゃるのではと、やんわりお断り申し上げたが、「僕が健康であれば引き続き会長職を務めさせていただくが、体が思うように動かない。このままでは会にご迷惑をお掛けするのでこの際、若い人に引き受けて欲しい。世話人会も全員賛成で、君をサポートすると約束されている。」と、電話の向こうで頭を下げられている島崎さんを想像すると、現役から退いたと云っても健康で体が動く自分が断ることの不誠実さを痛感して「島崎さんの足元に及びませんが、引き受けさせて頂きます。」とお答え申し上げたことを、昨日の出来事のように思い浮かべています。

新・旧会長の交代にあたる昨年の総会に、「新会長へはなむけの言葉を述べる」と頑張っておられましたが、総会の数日前にお電話を頂き「どうしても体が動かない。欠席せざるを得ない」と無念さを述べられました。総会終了後、お電話で「お陰様で無事、総会・懇親会が終了しました。」と、ご報告申し上げた際は、お喜びになられ会を盛り立てて欲しいと激励されました。

この暖かいお言葉が島崎さんとの最後の会話になりました。

この一年半を思い出すと、ご自分のお体の衰弱との激しい戦いだったのではと推測いたします。

ニチメンを心の底から愛され、最後まで尽くされた島崎さんには頭が下がる思いでいっぱいです。

安らかにお休み頂きたいとお祈り申し上げます。

合掌

Nmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnmnm

{追憶}端倪すべからざる人文主義者、島崎さんのこと

竹　内　可　能

このような日がいつかはやって来るだろうことを久しく覚悟の上ではあったが、しかし告別式の日、最後のお別れにと御大の眠る棺のなかに菊の花を手向けようとしたときである。わたしは御遺体の足元にさりげなく置かれていた塩野七生女史による「ローマ人の物語」のブックカバーを見て、さすが万感胸にせまるものを禁じ得なかった。

御大の葬儀を前にしてさる友人が、「たまプラーザの空の下、心にぽっかり開いた穴

……」などと、わたしの心情を忖度してメールを送ってくれたが、わたしは今あらためて世俗の無常と寂寞を思うほかはない。

思えばわたしと島崎さんのお付き合いは、お互いご近所住まいという関係もあって、氏の半生ともいうべき会社生活と、リタイアされた後の個人的な余生をふくめればおよそ半世紀に及ぶ。しかし御大の会社生活における猛烈な仕事ぶりや華々しい業績の数々、一時銀座の帝王とまでいわれたネオンの街の物語や、お酒が入れば人を魅せては止まない語り口などについては、先刻大多数の島崎ファンご承知の上はここに割愛させていただこうと思う。

そのかわり今この紙上をお借りしてわたしが申し上げたいと思うのは、御大の会社生活だけではなく、そこを引退されてからの知られざる個人的な余生をふくめて、それは一言でいえば「端倪すべからざる」読書人生のことである。もって御大にたいする追悼の誠をささげたいと思う。

氏がもともと根っからの読書好きであったことは言うを俟たないが、とはいえ氏の会社生活における本格的な読書のなれそめが、司馬遼太郎の「国盗り物語」にあったことは否めないだろう。仕事上での現実の凄絶な商戦への熱い思いも手伝ってか、この物語にたいする氏の感慨は尋常なものではなく終生消えることはなかった。氏はこのことを常々酒の席で述懐して止むことはなかったからである

わたしは御大の読書生活を総括するとすれば、司馬遼太郎に始まり塩野七生女史に終わると言っても過言ではなかろうかと思う。しかしその間の氏の膨大な読書量とその分野は筆舌に尽くしがたく、わたしはそれを「端倪すべからず」の一言にくくることにした。司馬遼物と言えばその後の氏は、「竜馬がゆく」や「坂の上の雲」、「翔ぶが如く」、「播磨灘物語」など、さらには「韃靼疾風録」や「空海の風景」といった人口に膾炙した著名な作品群を経由して、遂には「街道をゆく」に至る、ここまでは御大も御多聞にもれぬ読書界の道を通ったものと思われる。

因みに御大の興味つきない読書歴の一端を書きとどめておこう。その一つだが司馬遼についていえば、「峠」や「歳月」、「花神」といった傑作を読んだのは、どれも不思議なことに氏の引退後かなりの年月がたってからだったことと

気付かされる。わたしの解釈によれば、その理由はいずれも河合継之助や江藤新平あるいは村田蔵六といった主人公が、あまりに悲劇性を帯びているため在職中には読む気になれなかったのではないか。そういえばこの三冊はともに文庫本でしかも古本だった。今もわたしの手元に残されているのは御大が回し読みにと私にくれたものだからである。

もう一つ逸話をお話ししておきたいことがある。それは件の塩野七生女史による「海の都の物語」のことだ。多分御大が会社の役員になりたての頃だったと思う。普段懇意にしていただいていた大手得意先の役員さんから、これも酒の席かと思われるが、はなはだ厳しい忠告をもらったという。その御仁の忠告というのが、大手の商社の役員たらん者、文化的な最低条件として、せめて「海の都の物語」程度の本は読んでおくべしということだったらしい。

残念ながらこのとき御大はこの作品をまだ手にもしていなかったのだろう。御大は会社生活を離れてからも折に触れこの時の忸怩たる思いを語り続けてきた。思えば氏の塩野七生との邂逅はこの時だったと思われる。その後の氏の読書生活にとってまさに革命的な出来事だったといえるのではなかろうか。それからというもの、御大はやみくもに塩野七生の膨大な一連の著作の読書に取り掛かったのであろう。くだんの「ローマ人の物語」にたどり着くまでにそれほどの時間を要したとは思われない、まだ在職中のことであった。

実はこのわたし自身にも、不思議にも御大と全く同じような、しかしそれも御大

その人から直接受けることになる、わが読書人生のなかの最大の衝撃のことをここに是非記しておきたいのである。それは島崎藤村の作品「夜明け前」のことだった。

　あるとき、といってもそれは御大もわたしもまだ十分若い時分の頃だったが、御大は私に向かって「夜明け前」を読んだことがあるか質問してきたときのことだ。わたしは藤村と同じ信州人として少年時代から、この作家の詩歌や作品にはある程度なじんできた自負はあったものの、この作品には触れていなかった。それと知った御大がいみじくもこのわたしにいった言葉が今も耳底に響くことがある。「日本の現代文学を云々というなら、まず「夜明け前」を読まなくちゃ」と。

　わたしはこの藤村の作品を読み終えたときの，ふるえるような感動を今も忘れることはできない。そしてわたしは先ず信州人であることを恥じたが、実はそれよりも驚嘆したことは、島崎さんというまぎれもない理系の先輩が、文系のこのわたしより先に現代文学のなかの藤村を理解していたことであった。そんなこともあって、わたしはあるとき御大に向かって質したことがある、御大はたしか大学では理系の出身のはずだが……と。

　そのときの臆面もない氏の返事をわたしは今も覚えている。「俺のDNAは理系じゃない文系だよ。それが証拠には大学(京大)じゃ成績はいつもびりっけつだった」と。その後もことあるたびに繰り出した回顧談、御大が大学の卒業時、おりからの就職難でなかなか就職にありつけなかったが、最後の段階になってようやく商社のニチメンに理系として拾われることとなったご自分の物語はつとに有名だった。会社をリタイアした後に氏と読書生活を共にしてきたわたしにとって、畢竟するに島崎さんという先輩からは、理系だの文系だのという領域とはおよそ埒外の、一言でいえば猛烈な商社マン気質の顔にくわえて、それとはまた裏腹の、これまた端倪すべからざる人文主義者（humanitarian）の顔を併せ持つ、氏の人間像が浮かびあがってくるのである。

　そういえばわれわれ二人に共通の読書歴のなかで、特に忘れられない三人の作家がいたことも記しておきたい。その一人は戦後間もない頃から自由自在な人文主義の権化のような作家、堀田善衛のことである。末尾には特に御大お好みの２作品を挙げたが、二人が長い間この作家の作品群にかまけて読み合った年月のことが思い起される。

　つぎに梅原猛がいたことを特記しなければならない。御大が愛したこの学者の三作品も末尾に記したが、これら作品群に共通の思想は、黎明期の日本史の手厳しい探究を通じて、摩訶不思議な日本文化の社会的な解明だった。われわれは梅原猛独特の歴史発見にたっぷりと酔いしれたものである。

　最後にもう一人、辻邦生をあげなければならない。この作家はわれわれ二人にとって不思議な存在だったように思える。その作品はどれも得てして難解だったが、繊細と知的であることがかえって蠱惑的で、ついには二人とも競うようにして全作品に挑戦したものだ。

　追憶の終わりに、先にも少し触れたことだが、御大がご自分で読み終えた本は特別に気に入ったもの以外、全て回し読みと称してこのわたしのところに回してくれてきたが、そんな氏の妙な習わしについて触れておきたい。とりわけ「ローマ人の物語」は大変な氏のお気に入りと見えて、最初からこれだけは自分の蔵書として君に回すわけには行かないと言っていた御大の言葉が蘇る。棺の中に置かれていたこの本のブックカバーを見たときの私の感慨はそのことだったのだ。

　くわしく数えたわけではないが、この伝でわたしが島崎さんから譲り受けた本の数といったら、お亡くなりになる前の一年間をのぞいて、氏のリタイア後のおよそ十五年間に少なくとも一千冊はくだらないものと思われる。何とこの間わたし達は毎月2～3回くらいのペースで、近所のしがない風

情の中華料理屋にお互い寄り合っては読書会に名を借りた飲み会をやることにしてきた。さよう読書会などと言っても、特に感動や驚嘆を覚えた直近の読書についてお互い感想を吐露し合うといった以上のものでななく、実際には飲み会そのものではあった。しかし先述したように御大が読み古した本を、その都度何冊かにたばねて私が譲り受けてきたのは、決まってこの席上だったのはたしかなことであった。

そんな中にあって「ローマ人の物語」の他、御大が読み終えたにかかわらず私に回ってこなかった作家と作品群を伺い知ることは、大変興味あることと思われる。それらは多分ご自分の書架にしまわれてきたものと拝察され、かつは御大の膨大な読書歴のなかから、選りすぐられた愛読書のリストと言っても差支えなかろうと思われるからである。

そんなリストを以下に記してわが追憶の証しとし、もってわが人生の師、故島崎さんへの追悼とさせていただければと思う。

合掌

記

以下は作家塩野七生を筆頭に列記するが、司馬遼太郎については数えきれない多くの作品が古くから永きにわたり、わたしの記憶に定かではないこともあるため敢えて割愛させていただくとしたい。とはいえおよそ全てにわたる司馬遼物という司馬遼物が、まさに御大の愛読書だったことはここに言うを俟たない。

1） 塩野七生 「海の都の物語」、「ローマ人の物語」全15巻、「わが友マキァヴェッリ」、「ローマ亡き後の地中海世界」全2巻、「十字軍物語」全2巻、「フリードリッヒ2世の生涯」全2巻
2） 堀田善衛 「ゴヤ」、「ミシェル・城館の人」
3） 梅原猛 「水底の歌」、「神々の流竄」、「隠された十字架」
4） 辻邦生 「背教者ユリアヌス」、「春の戴冠」、「西行花伝」,「嵯峨野明月記」、「安土往還記」
5） 陳舜臣 「阿片戦争」
6） 島崎藤村 「夜明け前」
7） 中島　敦 「李陵・山月記」
8） トーマス･マン 「魔の山」、「ワイマールのロッテ」
9） ニーチェ 「ツァラトゥストラはかく語りき」
10） ドストエフスキー 「罪と罰」、「カラマーゾフの兄弟」

（終わり）

前列左より：奥村、（故）望月、竹内、（故）島崎、大村、村上
後列左より：鈴木、牧野、足立、鈴木（穣）、保泉、滑川、桝村
最後列左より：津曲、橘

追悼 わが師島崎さんのこと

吉　海　秀　造

思えば、島崎さんが大阪からの転勤で東京勤務となられたのは、確か1965年のことだったように思う。 爾来私が島崎さんとお付き合いいただいてきたのは会社での氏の所轄になる化学品部門所属時代を中心とした前後、その間およそ50年、私は氏の後塵を拝するようにして、公私にわたりお世話になってきたことになります。

特に1975年にイタリアニチメン・ミラノ駐在を終えて帰国し、その足で購入した建売住宅が、島崎さんのお宅から目と鼻の先だったという偶然が重なり、とりわけ親しくさせていただくことになりました。

今私の記憶は、走馬灯のように島崎さんとともに過ごしたいろいろな楽しい思い出となって、私の頭の中を駆けめぐっています。時節にお構いなく大人数でご自宅を訪ねての夜遅くまでの歓談、海外にご出張の折空港でお出迎えした記憶、海外客先との商談場面、ともに楽しんだ内外でのゴルフや観光、とりわけ氏が定年退職されてから後の10年間ほど、たまプラーザ駅近辺で催してきた月数回の欠かさずの飲み会の楽しかったことといったら、筆舌に尽くしがたい思いがいたします。

なんといっても氏の周りには常に自然に人が集まり輪ができる、故人にはそうした人を引きつけて止まない、溢れるばかりの不思議な魅力がありました。

お蔭様でこの私も多くの皆さんと親しくお付き合いさせていただく機会に恵まれました。我が人生の僥倖といっても過言ではありません。末筆ながら私ごとになりますが、私が早期退職にあやかり私人として事業を始めました時、故人がこの私に賜った大変な個人的ご援助の数々は、終生忘れることはないでしょう。あえてこの場をお借りして故人に感謝の誠を捧げたいと思います。

本当に惜しい方がお亡くなりになり残念でなりません。まだまだこれからも氏の薫陶をうけながら、人生を楽しませて頂こうという矢先でしたのに。

心より哀悼の意を表します。

合掌

右から二人目故島崎さん、左端筆者

【編集後記】

我らが社友会の『会報』のスタイルと内容構成は初代編集長･長谷川洋さんの創作である。その姿は既にして、「文藝春秋」のそれを想わせる “良きマンネリズム” を呈している。

茲に、長谷川さん最後の編集後記（部分）を再録してみたい。 viz.,
「（前略） 今回で、この『会報』もちょうど20号となる。（中略） このあたりで、会報チームも交代の時期を迎えており、次号より新進気鋭の編集主幹が登場するかと思います。
筆者は、今後は一兵卒として協力していきます。（中略）最後に、谷村新司の『昴』：
“♪ 我も行く、心の命じるままに、われも行く、さらば昴よ　♪” で 閣筆とします。」

主幹のお役目10年間、本当にお疲れ様でした。 心より御礼申し上げます。

ということで本号より、その役目が新進気鋭でも何でもない 唯の古株･愚生に回って来ました。
そして、世代交代準備のため、新たに奥村世話人と中田世話人に加わってもらいました。
私たち3人は、長谷川さんの創り上げた“良きマンネリズム”を引き継いで参る所存です。
会員諸兄姉の御支援、どうぞヨロシクお願い申し上げます。

これからも長く続くべき「会報」に、友人・知人お誘い合わせの上、奮ってご寄稿下さい。
随筆、珍談奇談、書評、同好会・同期会・部門OB会ニュースなどなど、何でも歓迎です。

（倉持　次雄）

ニチメン東京社友会

〒100－8691　東京都千代田区内幸町２－１－１
飯野ビルディング17Ｆ

発　行　人：倉又　則夫　副会長兼世話人代表
編　集　部
顧　　問：長谷川　洋　副会長兼世話人
責　任　者：倉持　次雄　世話人
部　　員：奥村　睦夫　世話人
　　中田　龍彦　世話人
印　刷　所：㈲　関　内　印　刷